1 古文入門

単元のねらい

◆説話のおもしろさを味わう。
◆文語のきまりを理解し、古文に親しむ。
◆歴史的仮名遣いの読み方を理解し、古文を音読する。

・登場人物が何をどうしているのか、話の筋を押さえさせ、話のおもしろさ、読みどころなどを考えさせることで、古典の世界の奥行きを感じ取らせる。
・古典の世界に親しむために、歴史的仮名遣い、古今異義語や品詞、用言の活用と活用形など、文語のきまりの基本について理解する。
・古文学習の基本として、まず何度も音読させ、歴史的仮名遣いに習熟させ、しっかり読めるようにする。

本単元は「精選　言語文化」古文編の第一単元であり、入門の教材を配置し、古典の世界への導入を図ることをねらいとしている。

単元の構成

「宇治拾遺物語」より「児のそら寝」「絵仏師良秀」、「十訓抄」より「大江山」、計三教材を取り上げた。いずれも平易な文章と具体的な内容をもった説話である。「児のそら寝」では、軽妙な語り口で語られる児と僧の心情を読み取り、話のおもしろさを味わう。「絵仏師良秀」では、火事に遭った良秀の奇異に思える言動から、良秀の芸術に対する考え方を読み取らせ、話し合わせる。「大江山」では、小式部内侍と定頼の発言にどのような気持ちが込められているかを読み取りながら、和歌の表現技法について学習を進める。

「古文を読むために１」では、歴史的仮名遣い、古語と現代語、五十音図を、「同２」では、文・文節・単語、品詞、古文の特徴、古語辞典の引き方を、「同３」では、活用・活用形、動詞、形容詞、形容動詞、係り結びについて説明している。古典の世界に親しむために、

古典を読むために必要な文語のきまりについて学習できる。

「単元の言語活動１　声に出して古文を読む」では、「古文を読むために１」を参考にしながら、古文を読むときのルールを学び、本単元に採録した三教材を繰り返し音読し、古文を正確に読める力を養う。

古文入門

教材のねらい

1 選定の理由

「宇治拾遺物語」の中から「児のそら寝」「絵仏師良秀」の二教材、「十訓抄」の中から「大江山」一教材を学ぶ。どれも話の展開の仕方に魅力があり、生徒に抵抗を感じさせずに古文学習に入っていくことができる。また、重要古語も含まれており、古文読解の基本を身につけさせることができる。

「単元の言語活動１　声に出して古文を読む」は、古典学習の導入として、歴史的仮名遣いの読み方を学び、正確に読めるようになることをねらいとしている。

2 指導のねらい

古文を音読できるように、歴史的仮名遣いや文の切れ目を理解させ、繰り返し練習させる。また、誰が何をしたか、誰がどのように思ったか、内容を正確につかませる。古語と現代語の違いや、古文の特徴など、「古文を読むために」をもとに、古文学習の基礎を押さえさせる。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕								・表現力等〕	
		(1)ア	(1)ウ		(1)エ	(1)オ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	B(1)ア	B(1)イ
		言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	掛詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
児のそら寝		○	○		○			○	○	○	
古文を読むために１		○	○		○			○	○	○	
絵仏師良秀		○		○	○		○	○	○	○	○
古文を読むために２		○		○	○			○	○	○	
大江山		○		○	○	○	○	○	○	○	○
古文を読むために３		○		○	○			○	○	○	
単元の言語活動１		○		○	○			○	○	○	

〔思考力・判断力			〔主体的に学習に取り組む態度〕			
B(1)ウ	B(1)エ	B(1)オ				
「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。	進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や古語と現代語の違いを理解し、学習課題に沿って、内容や展開などについて叙述を基に的確に捉え、僧たちが児を笑った理由を話し合おうとしている。	進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や文語のきまりについて理解し、古文に親しみ、学習課題に沿って、叙述を基に、絵を描くことについての絵仏師良秀の考え方について話し合おうとしている。	進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や、活用語の活用形や種類、係り結びなど文語のきまりを理解し、学習課題に沿って、掛詞の表現技法とその効果について理解しようとしている。	進んで説話のおもしろさを味わい、文語のきまりを理解し、古文に親しみ、歴史的仮名遣いの読み方を理解し、今までの学習を生かして、古文を音読しようとしている。
○			○			
			○			
				○		
				○		
	○	○			○	
					○	
○						○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動１　声に出して古文を読む【〔思・判・表〕B(2)ア】

古文入門

指導計画案

指導上の重点目標

【児のそら寝】

1　古典が親しまれてきた背景を考える。
2　歴史的仮名遣いに注意しながら音読する。
3　古文の基本的な学習の仕方を学ぶ。
4　主語と述語を対応させながら内容を正確に読み取る読み方を学ぶ。
5　場面の状況と登場人物の心情を把握する。
6　説話のおもしろさを味わう。

	学習活動	指導上の留意点
導入	❶ 日本の古典文学で、知っているもの、読んだことがあるもの（現代語訳も可）をあげる。どのような印象を持っているか、発表し合う。知技	❶ 生徒が小・中学校で学んだ古典などをあげ、生徒の興味を喚起する。
展開	❶ 「児のそら寝」を音読して、歴史的仮名遣いの読み方に慣れる。（「古文をよむために1」を参照する）思判表 ❷ 本文中の意味のつかめない部分を抜き出し、古語辞典で意味・用法を確認する。（「古文を読むために1」を参照する）→「言葉と表現」1 知技 ❸ 現代語訳する。誰が、何をしたという関係をたどりながら、話の展開をつかむ。知技 思判表 ❹ 児の心情の変化を話の展開に即してまとめる。思判表 →「学習のポイント」1	❶ 歴史的仮名遣いについては、無意識に読めるものとひどく違和感があるものがある。その双方を意識させて読ませる。 ❷ 古文特有の語や、現代語と形は同じでも意味の異なる語（古今異義語）を指摘させる。 ❸ 「待ちけるに」「ひしめき合ひたり」「待ちけるかともぞ思ふ」などの主語を把握させる。 ❹ 場面ごとの様子をつかんだうえで、それぞれの心情を考えさせる。
まとめと発展	❶ 僧の笑いの意味について考え、話し合う。主態 →「言語活動」1 ❷ 歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら	❶ 話のおもしろさがつかめたか確認する。 ❷ 語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・

【絵仏師良秀】

1　歴史的仮名遣いの表記に慣れて、古文の音読を読み味わう。

2　現代語と古語の違いを知って、辞書等で調べながら読解することを学び、古文の学習法について手掛かりを得る。

3　登場人物の行動をたどりながら内容を理解する。

		音読する。知技 思判表 ❸ 重要古語の意味・用法を整理する。知技
導入	❶ 絵仏師という仕事について説明する。 ❷ 仏像・仏画について知っていることを発表し合う。知技	❷ 生徒の興味を喚起する。資料集などを用いて画像を示してもよい。
展開	❶ 歴史的仮名遣いの読み方に注意して全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表 ❷ 本文中で現代語にない語、現代語と意味の異なる語などを指摘して、その意味を古語辞典で調べ、確認する。（「古文を読むために2」を参照する）知技　→**「言葉と表現」1** ❸ 現代語訳する。この話に登場する人物の心情とその変化を、順を追ってまとめる。知技 思判表　→**「学習のポイント」1** ❹ 良秀が絵を描くことに対してどのような考えを持っているかまとめる。思判表	❶ 範読や斉読を複数回試みる。本文で歴史的仮名遣いに該当する箇所をチェックさせて、なめらかに読めるようになるまで繰り返す。 ❷「あさまし」「わろし」「悪し」など重要古語の意味を古語辞典で確認する。 ❸ どのような感情から人々が見舞いに訪れたか、良秀の答えを聞いて、人々の感情がどのように変化したか、順を追って整理させる。 ❹ 良秀の発した言葉や行動について、なぜそのようにしたのかを順を追ってまとめ、考える。
まとめと発展	❶ 絵を描くことに対する良秀の考え方についてどのように思うか話し合う。主態　→**「言語活動」1** ❷ 歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技 思判表	❶ 結末の一文を手掛かりに、芸術作品とそれを生み出した良秀の人間性について話し合う。芥川龍之介「地獄変」と読み比べをさせて良秀の人間性について解釈を深めさせてもよい。

【大江山】

1　貴族の生活と和歌の関係を理解させる。
2　人物相互の関係と、各々の背景について大まかに把握させる。
3　和歌の修辞を理解し、話の内容に即した一首の意味内容をつかみ、小式部の機知を把握させる。
4　小式部と定頼の話を作者がどのように捉えているか読み取らせる。

導入	❶ 百人一首に「大江山」の歌が採られていることを話題にする。 ❷ 王朝貴族にとって和歌がどのような意義をもっていたかをとらえる。知技
展開	❶ 全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を理解する。（「古文を読むために3」を参照する）知技　→**「言葉と表現」1** ❸ 現代語訳する。個々の人物の背景と、おかれている状況を把握する。知技 思判表 ❹ 定頼の言葉と小式部の和歌に込められた意味をそれぞれ考える。思判表　→**「学習のポイント」1・2**
	❶ 便覧や辞書などに百人一首があれば参照する。かるたとして親しまれた歌の背景として、よく知られた話であることを解説する。 ❷ 勅撰和歌集や歌合などについて説明し、日本の古典を読むうえで重要な鍵となる和歌についての興味を促したい。
	❶ 会話や動作の主体に注意させる。読む前に、歴史的仮名遣いの文字に印をつけ、そこに注意しながら読むように指導するとよい。 ❷ 古語辞典を引く習慣をつけさせる。用語の活用について理解させる。 ❸ 会話や動作の主体に注意させる。小式部内侍と母和泉式部について調べ、それぞれの人物の置かれている状況をつかませる。そのうえで、彼らの心情を理解させる。自分が「小式部」、「定頼」の立場だったらと想像して、彼らの気持ちを推測させるのもよい。平安文学の理解に必要な「宮中」「後宮」「女房」などの知識を身につけさせる。 ❹ ❸の人物の背景と状況を参考にする。特に小式部の母の和泉式部が歌人と

【単元の言語活動１　声に出して古文を読む】

１　歴史的仮名遣いの読み方のルールを理解する。

２　音読を繰り返し、滑らかな音読ができるようにさせる。

	❺和歌の中の掛詞を説明する。知技	日本語の特色の一つである「同訓異字」であることから、現代でも「しやれ」として残っていることに気づかせる。
	❻「かかるやうやはある」と定頼が言った理由を考える。思判表	❻❹❺を参考に、定頼の予想がどのように裏切られたのかを考えさせる。
	❼作者の考えが書かれている部分を指摘し、内容をまとめる。思判表	❼「これはうちまかせて…」以下の最後の部分から、教訓的な話として伝えられたことを読み取らせる。
まとめと発展	1「大江山」の和歌に用いられている掛詞についてまとめ、どのような点がすばらしいと考えられるのか、話し合う。主態 →**「言語活動」1**	1ワークシートや振り返りシートを活用し、「大江山」の歌に用いられた掛詞の意味を理解する前と話し合いの後で、「大江山」の歌への理解がどのように深まったか、自己評価する。
展開	1「古文を読むために1」を参照し、歴史的仮名遣いの読み方のルール1～4に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘する。知技 2「古文を読むために1」の1歴史的仮名遣いの読み方のルール5に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘する。知技	1「古文を読むために」1に基づいて、古文を読む際に注意しなければならないルールとそのルールを適用する本文箇所をチェックする。ルビになっているところもルールの適用箇所かどうかを確認する。 2 1のルールと5のルールを二段階に用いている箇所に気をつける。

まとめと発展	
3 グループを作り、「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を間違えた箇所で交代しながら、順に音読する。知技 思判表 主態	3 グループでひとりずつ、説話三教材を順番に音読する。その際に間違えたところで交代するというゲーム的な要素を取り入れて、楽しみながら音読の練習ができるようにする。

宇治拾遺物語

出典

▼底本

新日本古典文学大系「宇治拾遺物語　古本説話集」（三木紀人・浅見和彦他校注、平成二〔一九九〇〕年、岩波書店刊）によった。

▼成立・編者

「宇治拾遺物語」の成立時期については、説話文学研究一般の手続きによって、歴史上の事実と関わる内部徴証や他の説話集との本文関係を検証するほか、序文の記述と併せて検討が加えられているが、定説と言うべき結論に至っていない。建保年間（一二一三〜一二一九）から承久年間（一二一九〜一二二）の頃と見る説が多く、また、後の増補を想定する説もある。編者は不明だが、成立の事情については、序文に「宇治大納言物語」と言われる散逸説話集に、「後にさかしき人々書き入れたるあひだ、物語多くなれり」、「さるほどに、今の世に、…大納言の物語にもれたるを拾ひ集め、また、その後のことなど書き集めたる」ものが「宇治拾遺物語」なのだと記している。

▼内容

収録説話数は百九十七編で、類別されてはいないが、冊数がまちまちな諸本において、百三話までを前半とし、それ以下を後半とする分け方は一貫している。先行説話集に典拠のあるものが百四十三話あり、中でも八十二編が「今昔物語集」とほぼ同文と言えるほど近い関係にある。他に「古本説話集」と二十三話、「古事談」と二十話が直接または間接の伝承関係にある。仏教説話と世俗説話とに大別した場合、世俗説話が過半数となる。それらが順不同に雑然と並べられているようでもあり、編者の問題意識や連想が自ずからにじみ出てくるような配列となっているところもあり、「宇治拾遺物語」の文学性の一つのポイントになっている。そこには、転変する時代の底に変わることない人間の心理が的確に描き出され、会話部も多く、文体もそれにふさわしい和文体である。

参考文献

❊ **教師用**

▽**注釈書**

新編日本古典文学全集「宇治拾遺物語」小林保治他　小学館　平八

新日本古典文学大系「宇治拾遺物語　古本説話集」三木紀人・浅見和彦他　岩波書店　平二

新潮日本古典文学集成「宇治拾遺物語」大島建彦　新潮社　昭六十

校注古典叢書「宇治拾遺物語」長野嘗一　明治書院　昭五十・五十五

日本古典全書「宇治拾遺物語」野村八良

「宇治拾遺物語」（角川ソフィア文庫）中島悦次　KADOKAWA　昭三十五
「宇治拾遺物語」（岩波文庫）渡辺綱他　岩波書店　昭二十六〜二十七

▽研究書

説話文学の世界「宇治拾遺物語」長野嘗一他　笠間書院　昭五十四
日本文学研究資料新集「今昔物語集と宇治拾遺物語」小峯和明編　有精堂　昭六十一
「説話文学と絵巻」益田勝実　三一書房　昭三十五
「中世説話文学論」西尾光一　塙書房　昭三十八
「論纂　説話と説話文学」久保田淳他編　笠間書院　昭五十四
「説話文学の構想と伝承」志村有弘　明治書院　昭五十七
「説話の講座」小峯和明他　勉誠社　平三〜五

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「今昔物語集・宇治拾遺物語」佐藤謙三編　角川書店　昭五十一
鑑賞日本古典文学「中世説話集」西尾光一・貴志正造編　角川書店　昭五十二
研究資料日本古典文学「説話文学」大曽根大介編　明治書院　昭五十九
別冊国文学「今昔物語集・宇治拾遺物語」三木紀人編　学燈社　昭六十三
別冊国文学「新古典文学研究必携」市古貞次編　学燈社　平二

❊生徒用

「宇治拾遺物語」（角川ソフィア文庫）中島悦次　KADOKAWA　昭三十五
「完訳日本の古典　宇治拾遺物語」小林智昭・小林保治・増古和子　小学館　昭六十一
新潮古典文学アルバム「今昔物語集　宇治拾遺物語」小峯和明・藤沢周平　新潮社　平三
日本の古典を読む「宇治拾遺物語　十訓抄」小林保治・増古和子・浅見和彦　小学館　平十九

図版解説　**〈不動明王二童子像〉**

青蓮院蔵。一一世紀。絹本著色。作者未詳。国宝。絹本の濃茶褐色の地色に、朱と丹で激しく燃え盛り揺れ動く炎が描かれ、その中央に、剣と絹索を持した忿怒の形相の青不動明王が座し、右に矜迦羅童子、左に制吒迦童子を配する構図となっている。⇩P15

〈慕帰絵詞〉

西本願寺蔵。観応二年（一三五一）作。絵巻。一〇巻。本覚寺三世覚如の伝記を描いたもので、覚如の子慈俊撰。絵は藤原隆昌・隆章、詞書は三条公忠ら。一、七巻のみ文明十四年（一四八二）の補作で、絵は藤原久信、詞書は飛鳥井雅康。挿絵は寺院での調理風景。囲炉裏に鍋がかけられ、右奥には膳が用意されている。⇩P16

十訓抄

編者

序文の結びに、建長四（一二五二）年十月、京の東山に草庵を営む翁が編んだと記されているが、この「翁」が、誰かについては、菅原為長（「正徹物語」の記事による）、橘成季（「古今著聞集」の編者）、六波羅二臈左衛門入道（妙覚寺本の奥書による）などの説がある。今日、第三説が有力視されているが、その人物の詳細は分かっていない。紀伊の湯浅氏の長老で、六波羅探題に出仕して左衛門尉に任じた湯浅宗業、後に出家して智眼と号した人物であろうとする説（永井義憲）がある。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「十訓抄」（浅見和彦校注、平成九〔一九七〕年、小学館）によった。

▼成立・内容

「十訓抄」は、鎌倉時代中頃成立した説話集。三巻。ジックンショウとも読む。原本と特に変えたところはないが、表記や段落の立て方などについては、教科書としての統一した体裁に改めた。

「日本書紀」をはじめとする史書・物語から教訓的な二百八十の説話を、「第一　人に恵を施すべき事」「第二　憍慢を離るべき事」「第三　人倫を侮らざる事」「第四　人の上を誡むべき事」「第五　朋友を撰ぶべき事」「第六　忠直を存ずべき事」「第七　思慮を専らにすべき事」「第八　諸事を堪忍すべき事」「第九　墾望を停むべき事」「第十　才芸を庶幾すべき事」の十か条の徳目に分類してあげたものである。人々の教戒のために説話を集めるという構想には、穏健で常識的な人柄が感じられるが、あげられた徳目にも啓蒙的な意図がよく表れている。集められた説話もその意図に沿って、王朝世界の善美を伝えるものと、実際的な処世の知恵や教訓につながるものとが主たる内容となっている。

「大江山」は「十訓抄」「第三　人倫を侮らざる事」の第一話である。この話は当時から有名だったようで、「金葉和歌集」及びその撰者源俊頼の歌論書「俊頼髄脳」に見え、「袋草子」「古今著聞集」などにもほぼ同文で採られている。

参考文献

❊ 教師用

▽注釈書

「十訓抄」（学灯文庫）峯村文人　学燈社　昭三十五
「十訓抄」増補改訂版（岩波文庫）永積安明　岩波書店　昭五十八
「新編日本古典文学全集　十訓抄」浅見和彦　小学館　平九

▽研究書・研究案内

「日本の説話　1〜7・別巻」市古貞次他　東京美術　昭四十八〜五十一
「論纂　説話と説話文学」久保田淳他編　笠間書院　昭五十四
「説話文学の構想と伝承」志村有弘　明治書院　昭五十七
研究資料日本古典文学「説話文学」　明治書院　昭五十九

※生徒用

「十訓抄・古今著聞集要解」高橋貢　有精堂　昭四十八
「十訓抄・古今著聞集」長瀬治　旺文社　昭五十二
『陰陽師』（文春文庫）夢枕獏　文藝春秋　平三
「源博雅の龍笛　蘇る最古の笛譜」長谷川景光　フォンテック（録音資料）　平十三
「宇治拾遺物語・十訓抄（日本の古典をよむ）」小林保治・増古和子・浅見和彦　小学館　平十九

児のそら寝

要旨

僧たちがぼた餅を作るというのを、延暦寺の児が寝たふりをして待っていた。ぼた餅が出来上がり、ある僧が起こしてくれたが、待っていたと思われるのを恐れ、もう一声呼ばれてから返事をしようと寝たふりを続けていたら、僧たちが食べ始めたので、こらえきれずややあって返事をし、僧たちに大笑いされた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P一六・7〈ひしめき合ひたり。〉	延暦寺の僧たちが「ぼた餅を作ろう。」と言うのを、児が期待して聞いたが、起きて待っていたらよくないと思い、寝たふりをしていると、出来上がった様子であった。
第二	P一六・8〈この児〉〜終わり	僧が児に起きるよう声をかけたが、児はたった一度で返事をし、待っていたと思われたらいけない、もう一声呼ばれてから返事をしようと思うが、呼ばれず、僧たちがぼた餅を食べ始めたので、こらえきれず久しくたってから返事をしたため、僧たちに大笑いされた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①今は昔、比叡の山に児ありけり。②僧たち、よひ
係助・区別　格助・場所　ラ変・用　過・終
の つれづれ に、「いざ、かいもちひ せ む。」と 言ひ
格助・体修　格助・時間　感　サ変・未　意・終　格助・引用　八四・用
ける を、この 児、心寄せ に 聞き けり。③さりとて、
過・体　格助・対象　代　格助・体修　格助・状態　カ四・用　過・終　接
し出ださ む を 待ち て 寝ざら む も、わろかり
サ四・未　推・体　格助・対象　タ四・用　接助・単接　ナ下二・未　打・未　仮・体　係助・同類　形ク・用
な む と 思ひ て、片方 に 寄り て、寝 たる よ
強・未　推・終　格助・引用　八四・用　接助・単接　格助・場所　ラ四・用　接助・単接　ナ下二・用　存・体
し にて、出で来る を 待ち ける に、すでに し出だし たる
格助・状態　カ変・体　格助・対象　タ四・用　過・体　接助・単接　副　サ四・用　完・体
さま にて、ひしめき合ひ たり。
格助・状態　八四・用　存・終

④この 児、さだめて おどろかさ むず らむ と
代　格助・体修　副　サ四・未　推・終　現推・終　格助・引用
待ち ゐ たる に、僧 の、「もの申し さぶらは む。
ワ上一・用(タ四・用＋補動)　存・体　接助・単接　格助・主格　サ四・用(謙譲)→児　補動・八四・未(丁)→僧→児　意・終
おどろか せ たまへ。」と 言ふ を、うれし と
カ四・未　尊・用　僧→児　補動・八四・命(尊)→僧→児　格助・引用　八四・体　格助・対象　形シク・終　格助・引用
は 思へ ども、ただ 一度 に いらへ む も、待ち ける
係助・区別　八四・已　接助・逆確　副　格助・状態　八下二・未　仮・体　係助・同類　タ四・用　過・体

①今となっては昔のことだが、延暦寺に児がいた。②僧たちが、宵の退屈なときに、「さあ、ぼた餅を作ろう。」と言ったのを、この児は、（自分も食べられると）期待して聞いた。③そうかといって、（ぼた餅を）作り上げるのを待って寝ないのも、きっとよくないだろうと思って、（部屋の）片隅に寄って、寝ているふりで、出来上がるのを待ったところ、早くも作り上げた様子で、（僧たちが）騒ぎ合っている。

④この児が、（僧たちが）きっと起こしてくれるだろうと（思って）待っていると、僧が、「もしもし。目をお覚ましになってください。」と言うのを、うれしいとは思うけれども、たった一度で返事をしたら、待っていたのかと（僧たちが）思うといけないと思って、もう一声呼ばれて返答しようと、

か	と	もぞ	思ふ	とて、	いま	一声	呼ばれ
係助・疑問	格助・引用	連語（係助・同類＋係助・強意（係））	八四・体（結）	格助・引用	副	八四・未	受・用

て	いらへ	む	と、	念じ	て	寝	たる	ほど	に、	「や、
接助・単接	八下二・未	意・終	格助・引用	サ変・用	接助・単接	ナ下二・用	存・体		格助・時間	感

な	起こし	たてまつり	そ。	をさなき	人	は	寝入り
副	サ四・用	補動・ラ四・用（謙）僧→児	終助・禁止	形ク・体		係助・提示	ラ四・用

たまひ	に	けり。」	と	言ふ	声	の	し	けれ	ば、
補動・八四・用（尊）僧→児	完・用	詠・終	格助・引用	八四・体		格助・主格	サ変・用	過・已	接助・順理

あな、	わびし	と	思ひ	て、	いま	一度	起こせ	かし	と	思ふ
感	形シク・終	格助・引用	八四・用	接助・単接	副		サ四・命	終助・念押	格助・引用	

ひ寝	に	聞け	ば、	ひしひしと、	ただ	食ひ	に	食ふ	音
格助・状態	カ四・已	接助・順偶	副		副	八四・用	格助・状態	八四・体	

の	し	けれ	ば、	ずちなく	て、	無期	の	のち	に、
格助・主格	サ変・用	過・已	接助・順理	形ク・用	接助・単接		格助・体修		格助・時間

「えい。」	と	いらへ	たり	けれ	ば、	僧たち、	笑ふ	こと	限りなし。
感	格助・引用	八下二・用	完・用	過・已	接助・順理		八四・体		形ク・終

（食べたいのを）我慢して寝ているうちに、（ある僧が）「やあ、お起こし申し上げるな。幼い人は寝込んでしまわれたよ。」と言う声がしたので、ああ、つらいと思って、もう一度起こしてくれよと思いながら寝て聞くと、（僧たちが）むしゃむしゃと、ただ食べに食べる音がしたので、どうしようもなくて、久しくたった後に、「はい。」と返事をしたので、僧たちは、笑うことといったら際限がない。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶日本の古典文学で、知っているもの、読んだことがあるもの（現代語訳も可）をあげる。どのような印象を持っているか、発表し合う。知技(2)イ

❶生徒はすでに、小学校、中学校の国語の授業で、和歌、俳句、「竹取物語」「枕草子」「徒然草」「平家物語」などに触れている。それらを振り返らせると共に、高等学校では、そうした今までの学習を踏まえ、より詳細な内容把握や、本格的な鑑賞を目指すことを確認させる。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「児のそら寝」を音読して、歴史的仮名遣いの読み方に慣れる。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B(1)ア

❷本文中の意味のつかめない部分を抜き出し、古語辞典で意味・用法を確認する。（「古文を読むために1」を参照する）知技(1)ウ・(2)ウ

→**「言葉と表現」1**

❸現代語訳する。誰が、何をしたという関係をたどりながら、話の展開をつかむ。知技(1)エ　思判表B(1)ア

❹児の心情の変化を話の展開に即してまとめる。思判表B(1)ウ

→**「学習のポイント」1**

❶「古文を読むために1」を参照し、歴史的仮名遣いの読み方を確認する。教師の範読に続いて生徒に音読させる。適当な長さに区切りながら何度も範読、音読を繰り返す。また、そもそも歴史的仮名遣いとは何か。ということにも触れておきたい。現代語の助詞「は」「へ」が、歴史的仮名遣いの名残だということを説明するのもよいであろう。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷「古文を読むために1」を参照する。生徒にとって意味のつかめない部分は、古文特有語や古今異義語を含む部分であろう。そうした語を古語辞典で調べさせる。意味が複数あげられている場合は、文脈上どの意味を用いるべきか、前後の文脈から考

えさせる。「言葉と表現 1」であげた「念じ」「わびし」のほか、「おどろく」「いらふ」などの語も調べさせ、重要語として覚えさせたい。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸主語・述語の関係をつかみながら、内容を理解させる。主述関係を確認する部分は、「出で来るを待ちけるに」「ひしめき合ひたり」「おどろかさむずらむ」「待ちけるかともぞ思ふ」「あな、わびしと思ひて」など。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・話の展開について、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹児が心の中で思っていることが書かれている部分（心中語）に〈　〉を付けさせる。〈　〉を付けた部分を現代語訳し、それぞれの場面で児が何を思っているのかをまとめさせる。心中語を拾うには、引用の「と」に注目させる。

【評価】 児の心情の変化について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、教室での質疑応答や小レポートの提出などにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶僧の笑いの意味について考える。主態　→「言語活動」1

❷歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技(1)ア・(2)エ　思判表B(1)ア

❸重要古語の意味・用法を整理する。知技(1)ウ

❶僧たちはなぜ限りないほどに笑ったのか。笑うきっかけになった出来事と、そこに至る児の心情の変化、心の葛藤を踏まえ、まとめさせる。この「笑い」に生徒も大いに共感し、ほのぼのとした心境になるであろう。

【評価】 進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や古語と現代語の違いを理解し、学習課題に沿って、内容や展開などについて叙述を基に的確に捉え、僧たちが児を笑った理由を話し合っているか、分析する。

❷歴史的仮名遣いを正しく読めているか、単語や文節の途中で切るなど、不自然な読み方をしていないかに注意させる。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古

典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❸古語辞典の引き方を確認する。重要古語は教材や単元ごとにノートにまとめて、繰り返し復習させると実力がつくであろう。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ノート提出により、確認する。

指導上の注意点

●一六ページ

問 **(1)「かいもちひせむ」（2行目）と、(2)「わろかりなむ」（4行目）の「む」の意味の違いを答えよ。**

答 (1)意志　(2)推量

問 **答** **「この児、心寄せに聞きけり。」（3行目）とあるが、児は何を期待しているのか。**

補 **答** ぼた餅を食べられるであろうこと。

僧が「いざ、かいもちひせむ。」と言うのを聞いて右のように思ったのである。

問 **「さりとて」（3行目）以下の文で、児が心の中で思っていること（心中語）に〈　〉を付けよ。**

答 〈し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむ〉（3行目）、〈さだめておどろかさむずらむ〉（8行目）、〈うれし〉（10行目）、〈ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ〉（11行目）、〈いま一声呼ばれていらへむ〉（一七・1行目）、〈あな、わびし〉（3行目）、〈いま一度起こせかし〉（同）。

補 児の心中語より、その心情の変化を確認する。「と」という引用の格助詞に注目させるとよい。

問 **「し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて」（4行目）について、**

語句の研究

●一六ページ

2今は昔　「今は昔」「これも今は昔」「昔」「これも昔」など、説話、物語の冒頭に用いる常套句。解釈については諸説ある。「今は昔である」と捉え、「話の中の出来事が起こっている時＝昔」の時点に、語り手（作者）も聞き手（読者）もいると仮定しているという説（馬淵和夫ほか）もあるが、「今」は「語り手が語っている現在」とする説が一般的である。ここは従来の説に従って、「今となっては（それは）昔のことだが」と解釈した。

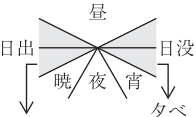
2比叡の山　比叡山は京都府と滋賀県との境にある。ここでは比叡山にある天台宗の総本山、延暦寺をさす。延暦七（七八）年に最澄によって開かれた。

2児　格式の高い寺院で、高位の僧の身辺の世話をする少年。出家者としての僧ではなく、俗体のままであって、昔話の小坊主などではない。貴族の子弟が高僧の身辺に仕えて、学問などの心得を学ぶような場合もあったようで、寺の中で、格別の存在として敬意をもって遇せられた。また、華やかな俗体の児姿から、墨色の寺にあって、一種の憧れをもって見られていた様子は、「徒然草」第五十三・五十四段の仁和寺の児の話などによく表れている。なお、「宇治拾遺物語」では、本教材の次の段も「田舎の児、桜の散るを見て泣くこと」と題する児の話題で、児への関心の高さがうかがわれる。

2ありけり　現在では「あり」は、物事に対して用いるが、古文では「いる」の意で、人に対しても用いる。助動詞「けり」は、間接的に伝聞した過去を表す。

2宵のつれづれに　「つれづれ」は、下二段動詞「連る」の連用形を重ね用いた語で、ある状態が長く続くさまを言うのが原義。変化がなく単調で、所在ない様子。「宵（よひ）」は、日没前後の「夕べ」と、「夜（または、夜中）」との間の時間。

なお、明け方に向かっての時間を指す「暁」と「宵」が対応し、「夕べ」と対応する日の出前の時間は「朝」または「あけぼの」となる。



2かいもちひ　用例が多様で、意味を特定し

1　(1)**「し出ださむ」、(2)「待ちて」、(3)「寝ざらむ」の主語は、それぞれ誰か。**

2　**この部分から、児のどのような気持ちがうかがえるか。**

3　**2の気持ちと同様の気持ちが表れている部分を、本文中から抜き出せ。**

4　**「わろかりなむと思」った結果、どのような態度をとったのか、(1)簡潔に説明せよ。(2)当てはまる部分を、本文中から抜き出せ。**

答　1(1)僧たち　(2)児　(3)児　2僧たちにぼた餅を食べたがっていると思われるのはみっともないと思う気持ち。3ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ　4(1)片隅に寄って、寝たふりをして、出来上がるのを待っていた。(2)片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちける

問　**児が「片方に寄りて、寝たるよしにて」（5行目）という態度をとったのは、なぜか。**

答　ぼた餅を食べたがっていると思われるのは、食い意地がはっているようでみっともないと、体面を気にする気持ちから。

補　この体面を気にする児の気持ちが、この話の発端である。この児の性格や育ちなども想像できるところであろう。また、「語句の研究」で述べているように、児という存在が僧たちの憧れの対象であったこともあり難い。「徒然草」第二百十六段には、「一献に打ち鮑、二献に海老、三献にかいもちひにて止みぬ。」とあるので、「酒の肴」とも考えられるが、第二百三十六段（「丹波に出雲といふ所あり」）では、土地の豪族が都人を地方に誘うにあたって「かいもちひ召させん」と言うような「御馳走」である。福田秀一氏は、「かいもちひ考」（「解釈」寧楽書房　昭和三十九）で、「その本義は、いはゆる『あんころ餅』乃至『牡丹餅』であつたが、既に中世から『そばがき』の意味の語『そばかいもちひ』の略称としても転用されてゐたのではあるまいか」と結論している。この話の場合、僧たちが夜の即席の食べ物として作っているので、そばがきの類であろうとも考えられるが、一般的にはぼた餅と解釈されている。

3し出ださむを待ちて　「し出だす」は、「物をつくりだす、事をやってのける」などの意。助動詞「む」は推量の意。ここは「…を待つ」という「待つ」対象を表す格助詞「を」に続く連体形で、「む」の後ろに「の」「こと」などを補って考える。「作り上げるの（こと）を待って」。

4寝ざらむも　「寝ないでいるとしたら、それも」。この助動詞「む」は、下に格助詞「も」が接続しており、このような場合は仮定でとることが多い。「もし…としたら、それも～」の意となる。ここは、児が気を遣いすぎるあまり、心の中であれこれ考えをめぐらしてしまうところなので、仮定とした。

4わろかりなむ　「わろし」は、相対的に見て「劣る、よくない」の意で、「絶対的、本質的に悪い、不快だ」の意の「あし」とは異なる点に注意する。同様に、相対的に見て「よい、悪くない」の意になるのが「よろし」で、「絶対的、本質的によい」の意は「よし」になる。順番に並べると、よい方から「よし」→「よろし」→「わろし」→「あし」となる。「なむ」は、強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」が付いたもので、「きっと…だろう」と訳す。

5寝たるよしにて　「たる」は助動詞「たり」の連体形で、ここでは存続の意。「よし」は、ここでは「そぶり、ふり」の意。「にて」は状態の意の格助詞。

5出で来るを　「出で来」は、起こる、出来上がるの意の複合動詞。

り、そのような立場への児本人の自覚もあったと考えられる。

問 **「すでにし出だしたるさまにて」（6行目）とあるが、何を「し出だし」たのか。**

答 ぼた餅

問 ◉**「思ひて」（4行目）「待ちけるに」（6行目）「ひしめき合ひたり」（7行目）の主語は、それぞれ誰か。**

答 思ひて＝児、待ちけるに＝児、ひしめき合ひたり＝僧たち

補 寝たふりをしてぼた餅ができるのを待っていたのは誰か、ぼた餅ができて騒いでいるのは誰か、把握させる。

問 ①**「おどろかさむずらむ」（8行目）の主語は、誰か。**

②**「おどろか（す）」の意味を、「おどろく」との意味の違いが分かるように説明せよ。**

答 ①僧たち　②「おどろか（す）」は「起こす」の意であり、「おどろく」は「起きる」の意である。

問 **「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」（9行目）という僧の言葉を聞いたとき、児はどのように考えたのか、三項目に分けて答えよ。**

答
- うれしいと思った。
- たった一度呼ばれて返事をしたら、待っていたのかと僧たちに思われるといけないと考えた。
- もう一

7ひしめき合ひたり　「ひしめく」は、擬態語「ひし」に接尾語「めく」が付いて動詞化した語。「押し合いへし合いする、集まって騒いでいる」の意。「合ふ」は、ここでは「みんなで…する、…しあう」の意の補助動詞。

8おどろかさむずらむ　「おどろかさ」は「人を起こす」の意の他動詞サ行四段活用「おどろかす」の未然形。「す」は使役の助動詞ではない。「むず（んず）」「らむ（らん）」は、それぞれ推量、現在推量の助動詞の終止形。

9待ちゐたるに　「ゐる」は「…ている」の意の補助動詞。

9もの申しさぶらはむ　「もの申す」は「もの言う」の謙譲語。相手に話しかけたり、案内を請うたりする時に使う言葉。もしもし。補助動詞「さぶらふ」は聞き手に対して敬意を表す表現。僧は児に対して丁寧に呼びかけている。

10おどろかせたまへ　「おどろか」は、カ行四段活用の自動詞「おどろく」の未然形「目が覚める、起きる」の意。「せ」は尊敬の助動詞で、「たまへ」は尊敬の補助動詞の命令形。「せたまふ」で二重敬語（最高敬語）になっている。二重敬語は、地の文では主に天皇や皇后、それに次ぐ身分や地位の高い人々に使用されるが、ここでは児に用いられていることに注意したい。「児」の項でも触れたように、この児は貴族の子弟など、よい家柄の出自であることがうかがわれる。僧たちが特別な敬意を持ってこの児に接していたことが、言葉遣いからも分かる。ここは会話文で、敬語が多用されることを前提としても、この児がそう扱われるだけの存在であったことを示しておきたい。

11いらへむも　「いらふ」は「返答する、返事をする」の意。「む」は、「寝ざらむも」の「む」と同じく、仮定の意。

11待ちけるかともぞ思ふとて　「『待ちけるか』ともぞ思ふ」とて、という文脈。「…もぞ…連体形」は、「…もこそ…已然形」と共に、「…したら困る、…するといけない」の意。生徒がよく見る例としては、「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」（「新古今和歌集」式子内親王）や、「烏などもこそ見つくれ（烏などが見つけては大変だ）」（「源氏物語」若紫）がある。「とて」は格助詞「と」

声呼ばれてから返事をしようと我慢した。

問 **僧たちの児に対する言葉遣いから、児が寺院の中でどのような存在であったことが分かるか。**

答 敬語が使われているところから、身分のある家の子供など、特別な存在であったことが分かる。

補 僧たちと児の関係を把握することで、場の雰囲気が感じられてくる。児が体面を気にするのも、ここにその理由がある。

問 **「うれし」（10行目）と対応して用いられている語は何か。また、それぞれどのようなことに対する心情か。**

答 対応している語　わびし
うれし…ぼた餅が出来たと起こしてくれたこと。
わびし…僧たちに寝てしまったと思われて、起こしてもらえなくなったこと。

補 語句の意味を正しく理解させ、そのうえで児の心情の変化をたどる手がかりにさせる。

問 **「うれし」（10行目）とは、ある予想が当たったときの思いであるが、(1)どのような予想か、簡潔に説明せよ。(2)どのような予想か、当てはまる部分を本文中から抜き出せ。**

答 (1)ぼた餅が出来上がれば、僧たちが自分をきっと起こしてくれるだろうという予想。
(2)さだめておどろかさむずらむ

問 **「いらへむ」「待ちける」「思ふ」（11行目）の主語は、それぞれ誰か。**

答 いらへむ＝児　待ちける＝児　思ふ＝僧たち

問 **「待ちけるかともぞ思ふ」（11行目）の現代語訳として、次の（　）に当てはまる語を入れよ。**
（　①　）が（　②　）を待っていたのかと、（　③　）が思うといけない。

答 ①児　②ぼた餅が出来るの　③僧たち

補 短い部分に異なる主語を持つ動詞があることに注意を促し、文意を正しく把握させる。

問 **「待ちけるかともぞ思」（11行目）われることを、児はどのように思ったのか。**

答 いじきたないと思われては体裁が悪いと思った。

問 **(1)前問のように思った児は、結局、どのような態度をとったのか、簡潔に説明し、(2)当てはまる部分を本文中から抜き出せ。**

答 (1)もう一声呼ばれてから返事をしようと、我慢して寝たふりをしていた。(2)いま一声呼ばれていらへむと、念じて寝たる

● 一七ページ

問 **「念じて」（1行目）とあるが、誰が、何を我慢しているのか。**

答 児が、起き出してぼた餅を食べたいという気持ちを我慢している。

に、接続助詞「て」が付いたもので、通常これで一語の格助詞と扱われる。「…と言って、…と思って、…というので」などの意。

● 一七ページ

1念じて　「念ず」は、①心の中で強く祈願する。②ぐっとこらえて我慢する。ここは②。

2な起こしたてまつりそ　「な」は禁止の意の副詞。「そ」は禁止の終助詞で、活用語の連用形（カ変・サ変には未然形）に付く。「な…そ」で「…するな、…してくれるな」。

2寝入りたまひにけり　「入る」は、「すっかり…する」の意の補助動詞。助動詞「けり」は、「児が寝入ってしまったことに今気づいた」という気づきの「けり」と呼ばれるもので、詠嘆の意。会話文や和歌などに多く見られる。

3わびし　思いどおりにならず、失意や困惑を感じる意の上二段活用動詞「わぶ」の形容詞形。ここでは「つらい」と訳した。

3起こせかし　「かし」は念押しを表す終助詞。起こしてほしいと強く願っている児の気持ちが込められている。

3ひしひしと　「むしゃむしゃと」。ここでは、

補 児の内心の本音と、態度が裏腹になっていることが、最後の笑いにつながるので、本音を確認しておきたい。

問 **「念じて寝」（1行目）ているうちに、どのような計算違いが起こったのか。**

答 僧の一人が、眠り込んでしまった児を起こさないようにと言い、僧たちだけでぼた餅を食べ始めた。

問 **「や、な起こしたてまつりそ。」（2行目）という僧の言葉を聞いたとき、児はどのように思ったか、二項目に分けて答えよ。**

答 ・ああ、つらいと思った。・もう一度起こしてくれよと思った。

問 **「聞けば」（3行目）とあるが、誰が、何を聞いたのか。**

答 児が、僧たちがぼた餅を食べる音。

問 **「えい。」（4行目）という返事はどの呼びかけに対するものか。**

答 「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」

補 内容理解に欠かせない問いである。必ず押えさせたい。

問 **児の返事を聞いて、僧たちはどうしたのか。**

答 大笑いをした。

問 **児の心理はどのように移り変わっているか、次のそれぞれの心理を移り変わりの順に並べ替えよ。**

㋐**予想が外れて困る。**㋑**空寝をして待っていたと思われることを恐れる。**㋒**期待しつつ待つ。**㋓**さらに慎重を期そうとする。**㋔**我慢できずに焦る。**㋕**予想どおりの事の運びを喜ぶ。**㋖**寝ないで待つことをみっともなく思う。**

答 ㋖→㋒→㋕→㋑→㋓→㋐→㋔

問 **この児の失敗は、結局、どのようなことが原因で起こったのか、簡潔に説明せよ。**

答 児という立場を弁えつつ、何とかぼた餅を食べようと気をまわしたのが、つくづく裏目に出たこと。

物を食べる様子を表す擬音語。

4 食ひに食ふ　格助詞「に」は、前後に同じ動詞や形容詞を繰り返して、その語の意味を強調する。

4 ずち　「術（ずち）」。「方法、すべ」の意。

4 無期　「際限がなくていつまでも続く」の意から転じて、「期間が長いこと、久しく時がたつこと」。実際の時間の長さもさることながら、児の心理的時間の長さを表現している。

5 笑ふこと限りなし　「限りなし」は、ここでは「限りがない、際限がない」の意。体面を気にして見栄をはっても、結局ぼた餅を食べたい気持ちが表れてしまった児の言動を微笑ましく思う、僧たちの笑いである。嘲笑ではなく、児の子供らしさを愛でる笑いと捉えたい。

鑑賞

比叡山の僧たちが、宵のつれづれに「ぼた餅を作ろう。」と言い出した。そこに居合わせた児が、「自分も食べたい。」と思うが、まさか僧たちが作るのを起きたまま傍らで待っているわけにもいかず、部屋の片隅で寝たふりをして待つことにした。

ぼた餅が出来上がり、「僧がきっと声をかけてくれるだろう。」と児が期待して待っていると、果たして「起きてください。」と僧に呼ばれた。ここまでは予期したとおりであったが、その後、児の思惑が狂いはじめる。別の僧が「もう寝てしまったからお起こし申し上げるな。」と要らぬことを言ったのである。

「もう一度起こしてくれよ。」という児の心の叫びをよそに、僧たちがむしゃむしゃとぼた餅を食べに食べる音だけが空しく響く。焦った児は、ためらい、心の葛藤もあったであろうが、食べたさに勝てず、最初の僧の呼びかけから相当な時間がたって後、「はい。」と返事をした。児は、そら寝をした当初からの心の内を知られ、僧たちに大笑いされたのであった。

「児のそら寝」の話の展開はたいへんおもしろく、児の心情の推移には誰もが共感できるであろう。人の思うこと、考えることには、時代を超えて共通するものがあり、そうしたものに触れ、共感できることが、古文を読むことの大きな魅力である。誰もがおもしろいと感じ、当時の人の心と共鳴できる本教材は、高等学校古文の冒頭教材にふさわしい。万一、古文はとっつきにくいのではと思い込んでいる生徒がいたとしても、そうした苦手意識を払拭できるにちがいない。

楽しみながら、かつ、人間の「心」のありようについて学べる古文に触れることは、生徒の心、精神の涵養に寄与するであろう。今後の古文学習をいっそう有益なものにするために、こうした古文を読む意義についても、授業において生徒に話しておきたい。

《板書例》　児の心情の変化

第一段落

ぼた餅を食べたいという期待
↔ ＝心の葛藤 ↓そら寝（我慢）
寝ないで待っていたらよくないという思い

第二段落

食べるよう声をかけられたうれしさ
＝心の葛藤
↓「いま一声呼ばれていらへむ」（我慢）
待っていたと思われたくないという思い
←
「食ひに食ふ音」
⇐
「ずちなくて」（もう我慢できない！）
⇐
時間が経過した後の返事＝そら寝の露見
⇐
僧たちの笑い

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「児」が心の中で思っていることが書かれている部分を、本文中から全て抜き出し、心情がどのように変化しているか、まとめてみよう。**

【答】①し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむ（一六・3）　②さだめておどろかさむずらむ（一六・8）　③うれし（一六・10）　④ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふ（一六・11）　⑤いま一声呼ばれていらへむ（一七・1）　⑥あな、わびし（一七・3）　⑦いま一度起こせかし（一七・5）

▼ポイント▲　登場人物は会話文において心情を吐露する可能性が高いので、まずは「児」の会話文に注目するようアドバイスするとよい。①では「ぼた餅ができあがるまで寝ないで待つことで、いやしいと思われるのを避けたい」という気持ちが読み取れる。「児」が《無欲であるかのように装って》振る舞っている点に気づかせたい。一方で、②・③では「ぼた餅ができたら僧達がきっと起こしてくれるだろう」という《期待》と、思惑通りに事が運んだ《喜び》が描かれている。さらに、④・⑤では、「再度、いやしいと思われるのを避けたい」と考え、《無欲であるかのように装って》いることを読み取る。⑥・⑦では、《あてが外れて》ぼた餅を食べ損ないそうになり、焦っている気持ちがあらわれているであろう。

以上の変化をまとめることが、ここでのポイントとなる。

言葉と表現の解答例

1 **次の語の品詞と意味を、古語辞典で調べてみよう。また、現代語の意味との違いについて、まとめてみよう。**

(1)　**念じ（一七・1）（注）「念ず」で引く。**

(2)　**わびし（一七・3）**

【答】(1)　①心の中で強く祈願する。②ぐっとこらえて我慢する。ここは②。現代語の「念ずる」には様々な意味があるが、「心の中で神仏に祈る」「ものごとの成就を強く願う」など、①に近い意味になることが多い。古語では現代語と異なり、②の「我慢する」という意味があることを押さえておきたい。

(2)　①（思い通りにならず）つらい。②さびしい。③貧しい。ここでは①。一方、現代語の「わびしい」には「もの静かでさびしい」「あわれな」などの意味がある。現代語と古語の意味はかなり共通していて、生徒達は、両者の違いは少ないという印象を持つのではないだろうか。必要なものが欠落していたり、落ちぶれた状態を意味するという点をイメージできるのではないだろうか。

▼ポイント▲　古語と現代語の違いを実際に調べることで、言葉には「現代に至るまでに変遷した意味」と「現代まで継承されている意味」の双方を持ち合わせているということを、生徒達に気

づいてもらうことを目標としたい。ここで取り上げた語だけでなく、各自が気になった様々な言葉の意味についても主体的に調べるように促したい。

言語活動の解答例

1　**「僧たち、笑ふこと限りなし。」（一七・５）とあるが、僧たちが笑ったのはなぜか、話し合ってみよう。**

【解答例】

（案１）寝ていると思っていた児が、突然、要領を得ない形で返事をしてきたことで、児が寝たふりをしていたのだと気づいておかしかったから。

（案２）児が寝たふりをしていることに気づきながらもわざと起こさずにいたら、ぼた餅食べたさに我慢しきれなくなった児が、突然、要領を得ない形で返事をしたのが、想定を超えた反応で、面白かったから。

児が寝たふりをしていたことに、僧たちが気づいていたかどうかで、二通りの解答が想定されるだろう。（案１）は僧たちが気づいていなかったとするパターン、（案２）は僧たちが気づいていたとするパターンである。できれば双方を生徒達に示し、どちらの解釈に合理性があるかを話し合わせたい。

（案１）の場合には、古典の作品にしばしば確認される「登場人物のすれ違い」について言及することができよう。古典の作品では、登場人物同士の思惑がすれ違うさまがしばしば描かれる。合理的に生きることの難しさや、運命に翻弄される登場人物の生き方を、時に冷静に、時に共感を持って描出する作品が数多く存在するので、他の作品と比較しながら古典の特性について考えるきっかけにもなるのではないだろうか。

（案２）の場合には、説話の演劇的な語り口の面白さにも言及できるのではないだろうか。この作品の読者は、僧たちが児の寝たふりに気づかずにぼた餅を食べ始めてしまったと感じながら読み進めてしまうが、実は僧たちが児の寝たふりに気づいていないように振る舞い、演じていたことが、最後に明かされている、という解釈である。私たち読者も、僧たちの演技にだまされていたと考えられないかという提案、とも換言できよう。ただ単に昔話を紹介するのではなく、その場に居合わせたような臨場感あふれる語り口で描写する手法は「宇治拾遺物語」で散見され、説話の語り口の面白さを認識するための、一つの手がかりになるのではないだろうか。

（小林　俊洋）

古文を読むために　1

古文学習の意義について、初めに生徒に説く場合には次のような説明が必要である。

1　読解の過程には、いろいろな事項があるが、古文を正しく理解するためにはまず文法的考察が必要であること。

2　直感によって読解ができることはあっても、それは客観性のない偶然の結果であること。

3　文法的事項は古文読解に役立つように理解し、それを帰納的にまとめ、言葉のきまりを導き出すようにすること。

さらに、古文の実際の学習にあたり、現代文との間には、(1) 単語（語彙）　(2) 仮名遣い　(3) 文法の三つの点で違いがあることに留意することを伝える。

次に具体的な説明に入ることになるが、このコラムでは、古語と発音の関係について解説している。古文の初めの段階では古文を正確に音読し、古文に慣れることが大切である。そのためには古語とその発音に関するルールに精通している必要がある。ルールを知って、自分で正しく音読できるようにするのがこのコラムのねらいである。仮名遣いと発音の変遷については特に生徒がよく理解しなければならないものではないが、教えている生徒の興味に従ってその概略を示すことで意欲的に学習に取り組むことができる場合もある。学校や学級の様子に応じて用いればよい。

1 歴史的仮名遣い

元来区別されていた仮名が、発音の変化に伴って同じ音に読まれるようになると、同じ音に対して二種以上の仮名の使い方がされるようになる。変化した発音のとおりの仮名を用いるか、変化前のいわゆる古典に載っているとおりの仮名を用いるかによって仮名遣いが異なってくる。歴史的仮名遣いとは、「文献（主として古典）に準拠した仮名遣い」をいう。一般的には平安時代中期以前の古典に用いた仮名に基づくものを「歴史的仮名遣い」と呼んでいる。

◎仮名遣いの変遷の大要

●上代特殊仮名遣い　万葉仮名（上代に漢字の音訓を借用して日本語を表記したもの。「万葉集」で用いられていることで有名なため、この名がある。）では、歴史的仮名遣いの四十七文字以外に、十四の仮名が二種類に書き分けられている。「エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・モ・ヨ・ロ」である（ただし、「モ」は「古事記」にのみ見られる）。この二種類の別は、音韻の区別であるとされているが、どのような音韻であったかは、定説はない。この中で、平安時代初めまで区別が存在していたと考えられるのが「エ」である。それは「いろは歌」に先立つ手習い詞（習字の手本の文字）である「あめつち」によって知ることができる。

あめ（天）　つち（地）　ほし（星）　そら（空）　やま（山）
かは（川）　みね（峰）　たに（谷）　くも（雲）　きり（霧）
むろ（室）　こけ（苔）　ひと（人）　いぬ（犬）　うへ（上）
すゑ（末）　ゆわ（硫黄）　さる（猿）　おふせよ（生ふせよ）

えのえを（榎の枝を）　なれゐて（馴れ居て）

ここでは「え」が繰り返されているが、「え（榎）」はア行のエ（e）、「え（枝）」はヤ行のエ（ye）だと考えられている。

●歴史的仮名遣い　平安時代中期の仮名の数は四十七である。これは「いろは歌」という手習い詞から明らかである。「いろは歌」は当時発音が区別されていた仮名を一回ずつ用い、仏教の無常観を歌ったものである。教科書と重複するが、再録する。

いろは（色は）　にほへと（匂へど）　ちりぬるを（散りぬるを）
わかよ（我が世）　たれそ（誰ぞ）　つねならむ（常ならむ）
うゐの（有為の）　おくやま（奥山）　けふ（今日）
こえて（越えて）　あさき（浅き）　ゆめ（夢）　みし（見じ）
ゑひも（酔ひも）　せす（せず）

＊　いろは歌のおおよその意味

全て美しく照り映えているものも、いつかは散り衰えてしまうものだ。これと同じように、我々人の世も無常なのだ。だから、あらゆる眼前の諸現象に惑わされることなく、それを超越し、解脱することを考えなければならない。いたずらに酔生夢死の生活は送るまい。

●ハ行転呼音（十世紀末～十一世紀初め）「ハ行転呼音」とは、「語中・語尾のハ行の仮名がワ行に発音されること」で、十世紀末から十一世紀初めにかけて一般化した。これにより、ハ行の仮名は、それぞれ、現れる位置によってハ行にもワ行にも発音されるようになった。今日、「私は学校へ行く」の「は」を「wa」、「へ」を「e」と発音するのはこの流れを汲んでいるのである。

●平安時代末～鎌倉時代初期　「お」と「を」、「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」の発音の区別が失われ、同音になる。しかし、仮名自体はそのまま存在していたから、仮名の用い方がしだいに混乱してきた。そのために、実際にものを書く場合にどの仮名を用いたらよいのかという基準が必要になった。その基準の一つが「定家仮名遣い」である。藤原定家（一一六二～一二四一）は、その作と推定される「下官集」の中で、「を・お」「え・へ・ゑ」「ひ・ゐ・い」の三類八項の仮名をあげ、それぞれの例語を記し、仮名遣いについての基準を示した。その後、行阿（源　知行）が「仮名文字遣」で、先の八項に「ほ・わ・は・む・う・ふ」の六項を加えて、各項ごとに例語を示した。「定家仮名遣い」と言われているのは、主としてこの「行阿仮名遣い」を指している。

●室町時代後期　「あう・おう・えう」などの連母音の読み方が、「オー・ヨー」と長音化し、例えば、「合ふ」は院政の頃、「ふ」が「ウ」となり、「アウ」と発音されたが、この頃は「オー」と発音されるようになった。

●江戸時代　「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」（いわゆる「四つ仮名」）の区別がなくなった。契沖（一六四〇～一七〇一）は、平安時代中期以前の文献はその仮名遣いが一定していて、混同していないことに気づき、「和字正濫鈔」を著し、その中で、「万葉集」などの古い文献から実例を求めて仮名遣いを定め、「定家仮名遣い」の誤りを指摘した。これを「契沖仮名遣い」といい、「歴史的仮名遣い」とは一般的にはこの「契沖仮名遣い」を指すのである。明治時代以降もこの歴史的仮名遣いが広く用いられていた。

●現代仮名遣い　「現代仮名遣い」は昭和二十一（一九四六）年、内閣訓令で交付された仮名遣いで、現代語を表記する場合のきまり

となっている。原則としては表音的仮名遣いであるが、部分的に歴史的仮名遣いも残存している。

◎歴史的仮名遣いと発音

仮名遣いとは、もともと「仮名の使い方」を示すが、一般的には発音の変化につれて、区別されていた仮名が同じ音に読まれるようになったため、同じ音に対して二種以上の仮名の使い方が可能になり、どの仮名を用いるかの基準を示すようになったものである。つまり発音のルールと密接な関係がある。そこで、このコラムでは歴史的仮名遣いと現代仮名遣いとの発音上の相違点をまとめて解説している。コラムの1歴史的仮名遣い中でまとめてある5つのルールがそれである。ここではいくつかの留意事項を追加しておく。

＊　①のルールでは、複合語の中では適用されないことに気をつけなければならない。

はつはる（初春）→ハツハル　　かたほ（片秀）→カタホ

＊　⑤のルールでは、例外の語があることに留意する。

あふひ（葵）→アオイ　　あふぐ（仰ぐ）→アオグ
たふる（倒る）→タオル　　けう（希有）→ケウ

＊　③・④のルールの解説

日本語は本来、直音（拗音・撥音・促音に対する語）だけの、母音で音節が終わる開音節語であったが、平安時代初めに、撥音便・促音便が起こった。しかし、このような音を表記するための字はなかったので、当初は無表記で、撥音が「ん」、促音が「つ」と書かれるようになるのは、平安時代も中期から後期になってのことである。また、漢字音の移入によって拗音が日本語の中に入ってきた。拗音には、「きゃ」「しゅ」「ちょ」などの、イ列の仮名に「や・ゆ・よ」を添えて表される開拗音と、「くわ」「くゐ」「くゑ」の合拗音とがある。開拗音は現代語にもあるが、合拗音は早くに失われ、「くわ」だけは、近代になっても残り、「しゃくわい（社会）」「くわがく（科学）」などと書かれた。

ところで、古典の文章に歴史的仮名遣いを適用するのは、実は便宜的な立場によっているのである。いわゆる歴史的仮名遣いは、近代になって、研究・調査の結果、定められたものであって、それぞれの古典が作られた時代にあったというのではない。「古今和歌集」が作られた十世紀初めは、表音仮名遣い（発音どおりに書く）の時代であったが、今日伝えられている「古今集」のテキストには成立当時のものはなく、いずれもずっと後代の写本であって、仮名遣いの乱れが起こってからのものである。その他の作品も同じで、これらの作品を書いた人も書き写した人も、そのような仮名遣いは持っていなかった。このテキストで、古文の本文を歴史的仮名遣いで統一してあるのも、ある種の都合によっているのである。

2 古語と現代語

言葉は社会制度や生活様式の変化により、移り変わっていくものであるが、我々が生きている世界の基本的な部分では変わらない。つまり、「山・海・雲・雨・春」「食べる・見る・着る」などは活用の仕方を除けば、古語も現代語も変わらない。平安時代中期の言葉を基礎として近世（江戸時代）まで用いられていた言葉を古語というが、現代語と共通している言葉も多いのである。そ

うすると、古文の中で意味の分からない語は、まさにその時代を映し出しているという意味で重要である。コラムの中で古文特有の語とあるのが、これに当たる。特に、当時の風俗・習慣などを表す語は図版も活用しながら、その内容にも注意を払いたい。また、敬語も多くはここに含まれる。古文の世界では、現在とは違って、厳然たる身分制が敷かれている。古文の登場人物相互の関係を正しく把握し、整理するのに、敬語の知識はたいへん役に立つ。さらに、一部の形容詞などもそれぞれの時代の価値観・自然観・世界観・美的感覚を表しているので、正確に読解することが重要である。

　コラムでは現代語と形は同じでも意味の異なる語（古今異義語とも言う）を取り上げている。先の項で触れた一部の形容詞はこれに当てはまるものも多い。それ以外にも思わぬ語が現代語と異なる意味を持っているので、十分に注意したい。

　特に、古文学習の初めにあたっては、これらを丹念に拾って解説しておくとよいだろう。古文を読む際に、全ての部分について力を入れて読む必要はない。分かりやすい所と分かりにくい所が必ずあるものである。そして、分かりにくい所にはこの二種の言葉が関わっていることが多い。そのポイントを初期の段階で理解しておくことは今後の学習にとって大きなプラスになることだろう。なお、古語を文語、現代語を口語ということがある。口語訳というのは現代語訳のことである。

3 五十音図

　仮名を音の性質から、縦に五字、横に十字ずつ、全部で五十字を配列した表を五十音図という。横を段と呼び、縦を行と呼ぶ。古文の五十音図では四十七文字が使用されているが、一部発音が同じために同じ仮名が用いられている箇所がある。その関係で特に、ア行・ヤ行・ワ行については気をつける必要がある。平仮名、片仮名どちらでも理解しておくと、漢文の訓読の際などにも有用である。本来の五十音図には、濁音・半濁音・拗音・促音・撥音（つまり「ん」は五十音図の表外に置かれる）は示されておらず、日本語の音韻の全部が表されているわけではないが、いろは歌よりは組織的で、音韻の変化・仮名遣い・活用などの説明に利用されている。また、辞書・索引なども、多くは五十音順に配列されているので、五十音図に精通することは古文の学習には欠かせない。

（畠山　俊）

絵仏師良秀

要旨

絵仏師の良秀は、家が火災に遭ったとき、妻子をも顧みず、燃え上がる火を眺めていた。人々が不審がると、自分にとっては、これで不動尊の火炎の描き方が分かったことこそが財産だと言って、他は全く顧みずに平然としていた。そのことの後、良秀の不動尊の絵の評価が高まった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P二〇・5〈つらに立てり。〉	絵仏師良秀の隣家から出火したとき、良秀は、妻子などが家の中にいるのも構わず、逃げ出た道路に立って、燃え上がる火の手を見ていた。
第二段	P二〇・6〈見れば〉〜P二一・2〈立てりけれ。〉	火は既に良秀の家に移ったのに、良秀はただそれを眺めていた。人々が驚きあきれていると、不動尊の火炎の描き方がこれで分かった、絵仏師としてはこの発見こそが財産なのだと言って、不審がる人々をあざ笑った。
第三段	P二一・3〈その後にや〉〜終わり	そのことがあって後、良秀の不動尊を描いた絵の評判が高くなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①これ（代・係助・同類）も（係助・区別）今（副）は（係助・区別）昔、絵仏師良秀（格助・引用）と（格助・引用）いふ（八四・体）あり（ラ変・用）けり（過・終）。

②家（格助・体修）の（格助・起点）隣より、火（力変・用）出でき（接助・単接）て、風（接助・単接）おしおほひ（八四・用）て、せめ（マ下二・用）けれ（過・已）ば、逃げ出で（ダ下二・用）て、大路へ（格助・方向）出で（ダ下二・用）に（完・用）けり。③人（格助・主格）の（格助・体修）書か（四・未）する（使・体）仏（係助・列挙）も（サ変・用（尊）語り手→仏）おはし（過・終）けり。④また、衣着（カ上一・未）ぬ（打・体）妻子（副助・例示）など（係助・列挙）も、さながら（副）内（格助・場所）に（ラ変・用）あり（過・終）けり。⑤それ（代）も（係助・同類）知ら（ラ四・未）ず、ただ（副）逃げ出で（ダ下二・用）たる（完・体）を（格助・対象）こと（格助・資格）に（サ変・用）し（接助・単接）て、向かひ（格助・場所）の（格助・体修）つら（格助・場所）に（格助・場所）立て（タ四・已）り（存・終）。

⑥見れ（マ上一・已）ば、すでに（副）我が（格助・体修）家に（格助・場所）移り（ラ四・用）て、煙・炎、くゆり（ラ四・用）ける（過・体）まで、おほかた（副助・範囲）、向かひ（格助・体修）の（格助・体修）つら（格助・場所）に（格助・場所）立ち（タ四・用）て眺め（マ下二・用）けれ（過・已）ば、「あさましき（形シク・体）こと。」と（格助・引用）て、人ども（八四・用）来とぶらひ（過・已）けれ（接助・順偶）ど、騒が（ガ四・未）ず。⑦「いかに。」と（格助・引用）、人、言ひ（過・已）けれ（接助・順偶）ば、向かひ

①これも昔のことだが、絵仏師の良秀という者がいたということだ。②（ある日のこと、良秀の）家の隣から火事が起こって、風が上から吹きつけて、（火が）迫ってきたので、（良秀は、家から）逃げ出して、大路に出てしまった。③（家の中には、）人が（注文して）書かせている仏（の画像）もいらっしゃった。④また、（寝たときのままで）衣服を着ていない妻や子なども、そのまま中にいた。⑤（良秀は、）そんなことも気付かず、ただ（自分が）逃げ出したのをよいことに、（大路の）向こう側に立っていた。

⑥見ていると、（火は）すでに自分の家に移って、煙や炎がくすぶって（いってきたが、そうな）るまで、ほとんど全てを、向かい側に立って眺めていたので、「たいへんなことですね。」と言って、人々が見舞いに来たけれども、（良秀は）落ち着いていた。⑦「どうしたのですか。」と、人が言ったところ、（良秀は、家の）向かいに立って、家

に　立ち　て、　家　の　焼くる　を　見　て、
格助・場所　タ四・用　接助・単接　格助・主格　カ下二・体　格助・対象　マ上一・用　接助・単接

うちうなづき　て、　時々　笑ひ　けり。　⑧「あはれ、　し　つる　せうとく
カ四・用　接助・単接　副　八四・用　過・終　感　サ変・用　完・体

かな。　年ごろ　は、　わろく　書き　ける　もの　かな。」　と　言ふ　と
終助・詠嘆　副　係助・提示　形ク・用　カ四・用　過・体　終助・詠嘆　格助・引用　八四・体

き　に、　とぶらひ　に　来　たる　者ども、「こ　は　いかに、
格助・時間　格助・目的　カ変・用　完・体　代　係助・提示　副

かくて　は　立ち　たまへ　る　ぞ。　あさましき　こと
副　係助・区別　タ四・用　補動八四・已(尊)人々→良秀　存・体　係助・強意　形シク・体

かな。　物　の　つき　たまへ　る　か。」　と　言ひ　けれ
終助・詠嘆　格助・主格　カ四・用　補動八四・已(尊)人々→良秀　存・体　係助・疑問　格助・引用　八四・用　過・已

ば、「なんでふ、　物　の　つく　べき　ぞ。　年ごろ、　不動尊　の
接助・順偶　副　格助・主格　カ四・終　推・体　係助・強意　副　格助・体修

火炎　を　悪しく　書き　ける　なり。　今　見れ　ば、　かう　こそ
格助・対象　形シク・用　カ四・用　過・体　断・終　副　マ上一・已　接助・順偶　副(ウ音)　係助・強意(係)

燃え　けれ　と、　心得　つる　なり。　これ　こそ、　せうとく　よ。
ヤ下二・用　詠・已(結)　格助・引用　ア下二・用　完・体　断・終　代　係助・強意(係)　間助・呼掛

この　道　を　立て　て　世　に　あらん　に　は、
代　格助・対象　タ下二・用　接助・単接　格助・場所　ラ変・未　仮・体　格助・理由　係助・区別

仏　だに　よく　書き　たてまつら　ば、　百千　の　家　も
副助・類推　形ク・用　カ四・用　補動ラ四・未(謙)良秀→仏　接助・順仮　格助・体修　係助・同類

出で来　なん。　わ党たち　こそ、　させる　能　も　おはせ
カ変・用　強・未　推・終　代　係助・強意(係)　連　係助・同類　サ変・未(尊)良秀→人々

が焼けるのを見て、うなずいては、時々笑うのだった。⑧（そして、）「ああ、大変なもうけものをしたなあ。長い間、（自分は、不動尊の火炎を）下手に書いていたもんだなあ。」と言った（が、その）ときには、見舞いに来た人たちは、「これは、いったいどうして、このように立っていらっしゃるのですか。あきれたことですよ。何かが取りついておいでなのですか。」と言ったところ、（良秀は）「なんだって、何かが取りつくものか。長年、不動尊像の火炎を下手に書いていたのだよ。今（本物の火炎を）見ると、こんなふうに燃えるのだと、悟ったのだ。これこそが、（私にとっての）もうけものよ。この（仏画の）道を専門にして世にあるとしたら、仏様さえ上手にお書き申したならば、百でも千でも家は出来るだろう。おまえさんたちこそ、これといった才能もお持ちではないのだから、物なんかを借しみなさるがよい。」と言って、あざ笑いながら（そこに）立っていた。

ね　ば、　物（もの）　を　も　惜（を）しみ　たまへ。」　と　言（い）ひ
打・已　接助・順理　格助・対象　係助・強意　マ四・用　補動八四・已（結）（尊）良秀―人々　格助・引用　八四・用

て、　あざ笑（わら）ひ　て　こそ　立（た）て　り　けれ。
接助・単接　八四・用　接助・単接　係助・強意（係）　タ四・已　存・用　過・已（結）

⑨その　後（のち）　に　や、　良秀（りやうしう）　が　よぢり不動（ふどう）　とて、　今（いま）　に、
代　格助・体修　断・用　係助・疑問　格助・体修　格助・引用　格助・時間

人々（ひとびと）、　め　で　合（あ）へ　り。
八四・已　存・終

⑨その後のことであろうか、良秀のよじり不動と呼んで、（良秀の描いた不動尊の画像を）今でも、人々は皆褒めたたえている。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶絵仏師という仕事について説明する。
❷仏像・仏画について知っていることを発表し合う。知技(2)イ

❷生徒の興味を喚起する。資料集などを用いて画像を示してもよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶歴史的仮名遣いの読み方に注意して全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B(1)ア
❷本文中で現代語にない語、現代語と意味の異なる語などを指摘して、その意味を古語辞典で調べ、確認する。（「古文を読むために2」を参照する）知技(1)ウ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❸現代語訳する。この話に登場する人物の心情とその変化を、順を追ってまとめる。知技(1)エ 思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❹良秀が絵を描くことに対してどのような考えを持っているかまとめる。思判表B(1)イ

❶範読や斉読を複数回試みる。本文で歴史的仮名遣いに該当する箇所をチェックさせて、なめらかに読めるようになるまで繰り返す。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷「あさまし」「わろし」「悪し」など重要古語の意味を古語辞典で確認する。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。
・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸どのような感情から人々が見舞いに訪れたか、良秀の答えを聞

いて、人々の感情がどのように変化したか、順を追って整理させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・人物の心情の変化について、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中の指名やノート提出などにより、確認する。

❹良秀の発した言葉や行動について、なぜそのようにしたのかを順を追ってまとめ、考える。

【評価】 良秀の芸術への考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノート提出などにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶絵を描くことに対する良秀の考え方についてどのように思うか話し合う。主態　→「言語活動」1

❷歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技(1)ア・(2)エ　思判表B(1)ア

読み方や文語のきまりについて理解し、古文に親しみ、学習課題に沿って、叙述を基に、絵を描くことについての絵仏師良秀の考え方について話し合っているか、分析する。

❷**【評価】** 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❶結末の一文を手掛かりに、芸術作品とそれを生み出した良秀の人間性について話し合う。芥川龍之介「地獄変」と読み比べをさせて良秀の人間性について解釈を深めさせてもよい。

【評価】 進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの

発問例と指導上の注意点

●二〇ページ

問 **「これも今は昔」（2行目）という冒頭句について述べた次の文の空欄を適切な語で補え。**

「これも今となってはもう（　①　）の（　②　）だが」の意。「これ」は、以下に語る一つの（　③　）全体を指す。一般に（　④　）系の物語に見られる慣用句である。末尾は、「となむ語り伝へたるとや」「となん」「とかや」などが用いられ、「（　⑤　）」と呼応する。

答 ①昔　②話　③説話　④説話　⑤今は昔

問 **「せめければ」（3行目）とは、何が何を「せめ」たのか。**

答 「火」が「良秀」（又は、人々）を。

問 **「人の書かする」（3行目）は、誰に「書か」せたか。**

答 良秀

問 **「人の書かする仏」（3行目）とは、何のことか。**

答 注文を受けて描いている、仏の画像のこと。

補 「書かする」が、描かせているの意であることに気付かせたうえで、「人の」の「の」が主格であることをつかませる。

問 **「おはしけり。」（4行目）と尊敬語が用い**

語句の研究

●二〇ページ

2これも今は昔　「これも」は、前の段を受けたもの。原典では、三十五話の「今は昔、…」を受けて、三十六～九話が「これも今は昔」になっている。「今は昔」は、説話の語り出しの定型で、これから語ることを不特定の過去の事柄とし、それを語り手の見聞という形で心理的に現在に引き寄せる起句である。「伊勢物語」の「昔、男ありけり。」から、「源氏物語」の「いづれの御時（おほんとき）にか、…」にも受け継がれ、「物語」の方法の基盤となった形式と言えよう。

「今となっては昔のことだが」と解されてきたが、馬淵和夫氏が、「今」を過去のある時に自分を置いた表現として、「これは昔のことだが」というように解すべきだと主張して、説得力あるものと評価されている。

2絵仏師　仏像の絵の制作を専門にする職業的な絵師。

2良秀　伝未詳。「十訓抄」では「絵仏師良秀といふ僧」とある。僧ならば「良秀」は「りょうしゅう」と読むのが適切である。

2風おしおほひて　風が覆いかぶさるように迫ってくる様子。「おし」は、上や横から強く圧力をかける意の動詞「押す」の連用形が接頭語として用いられたもの。なお、「十訓抄」（第六、三十五話）では、「家の隣より火出で来て、おしおほひければ」とあって、「火」が主語となっている。

3人の書かする仏もおはしけり　誰かが注文して書かせている仏画のこと。「おはし」は、「あり」「をり」の尊敬語「おはす」の連用形。「仏」に対する敬意を表す。

4さながら　副詞。①そのまま変わらず。②そっくり全部。ここは②。

5ことにして　「こと」は多義的であるが、ここでは火事から逃れたことをそれだけで十分なこととして、という意味でとらえたい。

5向かひのつら　「つら」は顔の側面を言うのが原義で、ここは、通りに面した側面のこと。

6くゆりけるまで　「くゆる」は、火が付いて煙が揺れ昇ること。また、その匂いが立つこと。

6おほかた　副詞。「総じて、およそ、全て」などの意。

られているのはなぜか。

答　主語が仏（の絵）であるから。

問「衣着ぬ妻子なども」（4行目）から、どんな様子が分かるか。

答　深夜、家族皆くつろいで、身支度を解いて寝ているときに、火事が起こった様子が分かる。良秀は、突然の火事の騒ぎに、慌てて家を飛び出したのである。

問「それも知らず」（4行目）の「知らず」の本文での意味を述べよ。

答　気付かず

問◉人々が「あさましきこと。」（7行目）と言ったのは、それぞれ、どのようなことに対してか。

答　「あさましきこと。」＝火事が起きて、良秀の家に燃え移ったこと。「いかに。」＝良秀が、自分の家が燃えているのに、平然としてそれを見ていること。

補　特に「あさましきこと。」について、「…として、人ども、来とぶらひけれど」に続いていることに注意する。

問「あはれ、しつるせうとくかな。」（9行目）について、

[1]　[易]「あはれ」の、ここでの適訳とその意味とを書け。

[2]　[中]「あはれ」は古語と現代語とでどのように意味が異なるか。

[3]　[難]A この言葉にうかがわれる良秀の心情を述べよ。

[中]B この言葉にうかがわれる良秀の心情を述べた次の文の空欄を適切な語で補え。

長年、納得のいく（　①　）を描けずにいたが、（　②　）を見て（　③　）の迫真性を感得した喜び。

答　[1] 訳＝ああ　意味＝嘆息する意。[2]（古）しみじみと感動する。（現）かわいそう。[3]A 我が家が燃える様子を見て、火炎の迫真性を悟り、大もうけをした喜びの気持ち。B ①火炎　②我が家の燃える様子　③火炎

問「わろく書きけるものかな。」（10行目）とあるが、何を「わろく書」いたのかが分かる部分を、後文から指摘せよ。

答　「年ごろ、不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。」

補　具体的に言葉に出したところは、右の答えのようになるが、良秀が「わろく書きける」と言ったのは、「絵仏師」としての全体的な反省の言葉であろう。

なお、この「問」・「答」にある「わろし」「悪し」については、「語句の研究」に記したように、厳密に語義をとらえる指導の例としたい。

問「かくて」（11行目）はどのようなことを指

7あさましきこと　「あさまし」は「事の意外さに驚きあきれる」の意。「見下げる」の意の動詞「あさむ」の形容詞形だが、事の善悪いずれの場合にも用いられる。

7来とぶらひけれど　「とぶらふ」は①問い尋ねる。②訪れる。見舞う。③弔問する。ここは②。

9あはれ　感動詞。感動詞の「ああ」と「はれ」とが複合した語。事柄に対する強い感嘆の念を表し、さまざまな心情を表現する名詞・形容動詞に展開した。

9しつるせうとくかな　「し」はサ変動詞「す」の連用形、「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、「しつる」で成し遂げたの意になる。「せうとく」は「所得（しょとく）」の転音と言われる。

10年ごろ　長年の間。古語では、「年頃」「月頃」「日頃」は同じような意味用法になり、副詞として用いられることが多い。

10わろく　「わろし」は「他と比較して劣る、基準以下の価値である」の意で、「よろし」の対。これに対して、「悪し」は「本質的に悪い、不快」だの意で、「よし」の対。

11物　対象として知覚・認識することができるもの全てを「もの」と言うが、ここは、

しているか、その内容に最も近い叙述の部分を抜き出せ。

答 向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。（8〜9行目）

問 **「あさましきこと」（11行目）は、「あさましきこと」（7行目）とは言っている内容に違いがある。ここでは、どのようなことに対して言っているのか。**

答 良秀が、自分の家が燃えているのを平然と見て、笑みをうかべていること。

問 **「年ごろ」（12行目）について、**
[易]ここでの意味を述べよ。
[中]この言葉は、古語と現代語とでどのように意味が異なるか。

答 [1]長年の間　[2](古)　長い間。数年来。
(現)　適当な年配。

問 ●**「この道」（14行目）とは、何のことか。**

答 仏画を自分の専門の技芸とする道。

補 「道」は、学問や芸能などで、自分の専門とする方面のこと。

問 **「仏だに」（14行目）の「だに」は、次のどちらに該当するか。**
(ア)類推の副助詞。「…でさえ…まして…」の意。
(イ)限定の副助詞。「…だけでも」

答 (イ)

問 **「書きたてまつらば」（二〇・14〜二一・1行目）の「たてまつる」は、どんな敬意を表しているか。**

答 「仏」をお書きする、お書き申し上げるの意になるので、「仏」に対する敬意を表す。

補 敬意表現のうち、尊敬と謙譲とについて、「立ちたまへるぞ」などと対比して、現代語訳を通して学んでおく。

●二一ページ

問 **「わ党たち」（1行目）と同内容の語句を抜き出せ。**

答 とぶらひに来たる者ども

問 **「あざ笑ひ」（2行目）のここでの意味を述べよ。**

答 無能で俗物を惜しむ人々をばかにする笑い。

問 **良秀は、自分の家の焼けるのを、なぜ平然と見ていられたのか、この答えとなる良秀の気持ちを示している部分を本文中から書き抜け。**

答 これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だによく書きたてまつらば、百千の家も出で来なん。（二〇・14〜二一・1行目）

問 **「その後にや、…人々、めで合へり。」（3行目）という結びの持つ余韻の意味を述べよ。**

答 時間的、空間的な次元を越えた芸術品を賞賛している。

畏怖・恐怖を感じ、忌避したい対象を、それと言い表すのを避けて、一般的な「もの」と表現する用法である。

12 なんでふ　どうして。なんで。「なにといふ」が変化した形。「物のつきたまへるか」と問われて、反発する気持ちを表す。

12 不動尊　不動明王。「明王」は、大日如来の命を受けて、一切の悪や煩悩を打ち破る諸尊のことで、五大明王（不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉）・八大明王（諸説あって一定しない）などがある。「不動明王」は、忿怒の形相をして、大火炎を背負い、右手に降魔の利剣を、左手に羂索（索条）を持っている。

13 かうこそ燃えけれ　「かう」は「このように」の意の副詞「かく」のウ音便。「けれ」は詠嘆の助動詞「けり」の已然形。

14 世にあらんには　「ん」は仮定の助動詞「ん」の連体形。なんらかの場合を想定して、その場合は「…としたら」という意で用いる。

●二一ページ

1 出で来なん　「な」は強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形。「ん」は推量の助動詞「ん」の終止形。「なん」で、「きっと…だ

問　**この説話において、絵仏師良秀はどのような人物として描かれているか、簡潔にまとめよ。**

答　一芸（仏画）に魂を打ち込む一途な生き方をする人物。

ろう」の意。

1わ党たち　お前さんたち。

1させる能　「させる」は、指示副詞「さ」、サ変動詞「す」の未然形、完了の助動詞「り」の連体形が複合した連体詞。多く下に打消を伴い「これと言った、大した」の意。ただし、一説に「指す」の命令形＋「り」とする。類語に「さしたる」がある。

3その後にや、…　「その後にや」とあって、下にまた「今に」とあるために、文が乱れている感じになっている。「十訓抄」では、「その後にや、良秀がよぢり不動とて、人々めで合へりけり。」とある。

3よぢり不動　「よぢる」は、ひねるように曲げる意。仏画の不動尊の背後に描かれた火炎がよじったような曲線であったことから、このように名付けられたのであろう。

鑑賞

芥川龍之介がこの話を基にし、「古今著聞集」巻十一の「巨勢（こせ）の弘高、地獄変の屏風を画くこと」などにも取材しながら、王朝物の小説群の一作「地獄変」を書いたことはよく知られている。芥川は、この絵仏師良秀の姿に、あくまで表現に執する芸術家の運命を見たのであろう。あるいは、これほどに突き詰めた技芸への執心にたじろぐ芥川の内心がうかがわれると言うこともできよう。

「宇治拾遺物語」の本文には、良秀の名が「よぢり不動」の画風とともに語り継がれたとあるが、この話は他に「十訓抄」六の三十五に採られているだけで、他の資料には見られない。けれども、良秀の特異な人物像を見事に語り尽くしたこの話は、時を越えて読者の心に訴えかける力を持っている。

良秀の人物像は、主として、見舞いに来た人たちとのやりとりの中で描き出されているが、その背景として、「風おしおほひて」迫ってくる中で、「大路」の「向かひのつら」に立って、「煙・炎、くゆりける」我が家の赤々とした火炎に照らし出される良秀の異様な姿が聞き手に印象づけられていることが効果的である。その良秀と対置される良識的な人々の気遣いやとまどい・反発は、聞き手の側のそれと通じ合っており、火炎の照り返しで赤く染まった良秀は、その人々＝聞き手に向かって長口舌を振るうのである。

ところで、小説「地獄変」で、良秀が一人娘が焼き殺される火と知りながら、炎熱地獄のありさまに見入ってしまうのは芥川の創作であるが、この「宇治拾遺物語」の解釈においても、「衣着（きぬ）ぬ妻子（めこ）なども、さながら内にありけり。それも知らず」の箇所について、良秀が知っていながら放置したように解しているものが多いのは、いかがであろうか。その方向で読むと、本文中に書かれてはいないが、「妻子ども」は焼死したことになり、良秀は妻子を犠牲にしてまでも芸術に執した男になる。あるいは、いずれにしても妻子は焼死したかもしれないのだが、知っていて見殺しにしたとなると大違いなのであって、語り手が妻子の成り行きに全く関心を払わないこととしっくりしない。また、良秀が「火事だ」と知って家を飛び出したときには、火炎の姿に心を奪われていたわけではないのだから、芸術に執して妻子を顧みなかったことにはならないと思う。

「火事だ」と知って、取るものも取りあえず身一つで飛び出してしまうような男、だからこそ、振り返って見た火事の、自分が「わろく書きける」火炎の見事な実景に、たちまち心を奪われて他を顧みない男、そのような人物として良秀は描かれていると思われるのである。

《板書例》

人の　書かする仏

←（意味）書かせている

（　　）ガ（　　）ニ書カセテイル仏

人　→　→　良秀

《板書例》

よし　　よろし
×（絶対的）　×（相対的）
悪し　　わろし

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **見舞いに来た人々は、絵仏師良秀に対してどのような感情を持っているか。また、その感情はどのように変化したか。順を追ってまとめてみよう。**

【答】 火災で延焼する自宅を眺めている良秀に対して同情していた。しかし、炎を見ていた良秀が「もうけものをした」と言って時々笑っている様子を見て、「物の怪が取りついたのか」と驚きあきれた。

▼ポイント▲　まずは、正確に本文を解釈することが重要になる。そのうえで、火災に見舞われた良秀が茫然自失で立ち尽くしているのを見た人々の「あさましきこと」という感懐と、炎を眺めて笑みを浮かべている良秀を見た人々が「あさましきことかな」という発言の含意には大きな違いがある点に気づかせたい。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の語の意味の違いを調べ、それぞれ現代語訳してみよう。**
わろく書きけるものかな。（二〇・10）
悪しく書きけるなり。（二〇・13）

【答】 ・あまり上手くなく　・下手に

▼ポイント▲　「わろし」は「良くない」、「悪し（あし）」は「悪い」と訳出するのが一般的だが、そのうえで、この場面の文脈を踏まえて解釈することが重要である。

「わろく書きけるものかな」「悪しく書きけるなり」はいずれも、長年火炎の絵がうまく描けていなかったということを指していると読み取りたい。良秀が実際に燃えさかる炎を見たことで「もうけものをした」と喜んでいるところから、解答のようにまとめることができるだろう。

言語活動の解答例

1 **絵を描くことに対して、絵仏師良秀はどのような考えを持っているか、まとめてみよう。また、それについてどのように思うか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）本文を正確に読み取りつつ、一般的には考えられないような良秀の価値観について理解することを目標とする。同時に、ひとりひとりが、そうした良秀の価値観についてどのように感じたかを主体的に発表する機会としたい。

（手順）

1　「絵を描くこと」に関して良秀の考えが反映されている箇所

がどこにあるかを探すように指示する。
2　良秀の会話文の中でも、特に「年ごろ～惜しみたまへ」の部分に着目し、正確に解釈する。
3　良秀の価値観について、どのように感じたかを生徒同士で話し合う。
（ゴール）現代において一般的な価値観が普遍的であるのではなく、多様な価値観が存在することについて理解する。場合によっては、芥川龍之介『地獄変』を紹介するなどして、良秀の価値観の特性について考えを深める。

（小林　俊洋）

古文を読むために　2

このコラムでは省略の問題を扱っている。読み慣れてしまえば、何でもないことであるが、古文には省略が多い。省略しても文意が通るので省略される。しかし、生徒のように苦労して古文を読む場合、その省略がしばしば分かりにくく、文意をとるのに混乱させられる原因となる。「が」「を」「に」などの助詞だけの省略ならまだしも、主語自体が、目的語自体が省略されるのだから、とまどうのも無理はない。古文に読み慣れることが一番の解決策であるが、文節や単語に対する感覚を鋭くしておくことも大切である。その点をこのコラムのねらいとしたい。

1 文・文節・単語

文・文節・単語のそれぞれの定義については教科書のとおりである。ここで注意を要するのは文節の考え方である。文を文節に区切るにはある程度意味を理解している必要がある。そのため、特に古文を文節に区切るのは初期の段階では難しい面がある。丁寧な解説を心がけたい。文節は意味の上でそれ以上区切ることができない単位である。したがって簡単な文例で文節に区切ることで、特に付属語はそれだけでは意味がとれないことをきちんと解説しておくとよい。また、文節と単語の関係についても説明しにくい部分がある。主語・述語といった場合、これが単語に与えられた名称とし、区別のために主部・述部という名称を用いることがあるが、通常は主語の文節、述語の文節を指す。主語・述語とは文節相互の関係を示す言い方である。それについて説明しておく。

◎**文節相互の関係**

●**主語・述語の関係**　次の三つの関係で文節が結びつくとき、主語・述語の関係という。

1　何が（主）どうする（述）　鳥　鳴く
2　何が（主）どんなだ（述）　山　高し
3　何が（主）なんだ（述）　我　師なり

●**修飾・被修飾の関係**　前の文節が後の文節の意味を詳しく表したり、叙述の態度を限定したりする場合、前の文節を修飾語、後の文節を被修飾語という。

1　被修飾語が体言のとき、連体修飾語という。
2　被修飾語が用言のとき、連用修飾語という。

●**独立語**　文の一部分であるが、前後の文節と直接関係を持たない文節を独立語という。感動・接続・呼びかけ・応答などを表し、文の初めにあるのが普通である。

このような文節相互の関係を正しく理解することが、古文を読み解くうえでも大切である。ただし、この後の活用の知識なども必要であるから、ここではアウトラインを示し、再度確認の時間を設けるとよい。

2 品詞

単語とは、それ自身意味や働きを持ち、それ以上小さくは分けられない語の単位をいうが、その単語を理解する際に、意味や形、働きなどの文法的性質に基づいて分類して捉えることがあり、それを品詞と呼ぶ。教科書Ｐ一六に載せた品詞分類表を参照された

い。

この中で特に注意を要するものは用言・体言である。用言は活用する自立語で、単独で述語になることができる動詞・形容詞・形容動詞の総称であり、体言は活用せず、単独で主語になることができる名詞のことである。連用修飾とは用言に掛かる修飾という意味であり、連体修飾とは体言に掛かる修飾という意味である。このように用言・体言という言葉は広く用いられるのでしっかりと理解しておきたい。

●自立語と付属語　品詞の理解が正確になされれば、助動詞・助詞の二つの品詞のみが付属語で、それ以外の品詞は自立語であるので、この区別は容易である。しかし、品詞に対する意識がない者はこの区別をするのも難しい場合がある。基本的な考え方は次の通りである。第一に自立語は必ず文節の初めにあり、付属語は文節の初めにはこないことである。第二に各文節には必ず自立語があるが、付属語はない場合もある。第三に各文節に入る自立語は一語だけということである。一方、付属語は一文節に複数入ることもある。したがって、自立語さえしっかり見分けることができれば、とりあえず、それを基準として文節に分けることができることになる。

●活用する語と活用しない語　この段階では現代語を例にとって活用する、しないを説明してもよいだろう。語には活用する語としない語があることさえ理解できれば、実際の活用については各品詞を学習する時に理解すればよいのである。

◎品詞分解

ある文中の単語を表に掲げた十種の品詞に分けていくことを品詞分解という。古文の文意を正しく捉える際にこの品詞分解が役立つことがある。しかし、文法が品詞分解に尽きるわけではなく、また、単語の分け方・品詞の分類の仕方自体が異論を含む場合もある。おおよその知識は必要ではあるが、品詞分解を万能視するのはかえって危険なこともある。生徒の実態に即して、段階に応じて必要な品詞分解ができる力を育てればよいであろう。各品詞の説明が終わった段階で正確な品詞分解ができるようになればよい。繰り返しになるが、品詞分解は解釈の助けになる場合に必要なのであって、それ自体が目的になるわけではないことは押さえておきたい。

品詞を分類する場合に注意を要することに接頭語と接尾語がある。単独では一語を構成しないで、常に他の特定の単語の上あるいは下に付いて、その単語とともに一語を構成するものを接辞といい、他の単語の上に付くものを接頭語、下に付くものを接尾語という。「語」とは付いているが、単語とは認められない。

●接頭語　他の単語の上に付いて、意味を添える働きをする。接頭語がついても、もとの単語の品詞は変わらない。例をあげると次のようなものがある。

名詞に付くもの　御前　初霜　小夜　素足　真心
動詞に付くもの　いい隠る　うち笑ふ　さし出づ　ひた走る
形容詞に付くもの　いち早し　か弱し　け近し　こ高し

●接尾語　他の単語の下に付いて、意味を添える働きをする。別の品詞になることがある。

〈品詞が変わらないもの〉
名詞に付くもの　中将殿　松ども　乙女ら　一首　二膳

＊「一首」「二膳」などのように数詞に付くものがあり、これを助数詞という場合もある。

〈品詞が変わるもの〉

名詞となるもの　暑さ　苦しみ　いはく
動詞となるもの　つよがる　紫だつ　けしきばむ　時めく
形容詞となるもの　ありがたし　らうがはし　露けし
形容動詞となるもの　苦しげなり　晴れやかなり
副詞となるもの　道すがら　手づから

接頭語、接尾語であることを理解したほうが品詞を考えやすいものがある一方、あまり意識しないほうが品詞を考えやすいものもある。必要に応じて解説すればよいのであって、接頭語であることや接尾語であることに神経質になりすぎてはいけない。

●複合語　単語が二つ以上結合して、一つの単語として、新しい意味や機能を持つようになった言葉を複合語という。「朝夕」「石橋」「近寄る」「心ぼそし」などがこの例である。複合語についても「走り回る」は「走る」と「回る」の二語かそれとも複合語かとなるとどちらとも決めにくい。その言葉が単語として辞書に載っているかどうかを目安にすることもできるが、これも辞書によって差がある場合も考えられる。複合語についてもあまりこだわりすぎず、知識として知っていたほうがよいくらいに考えておく。

3 古文の特徴

古文には助詞の**省略**が多い。そのために文全体の意味が分かりにくい場合が生じる。しかし、落ち着いて前後を読めば容易に想像できるから省略されていることを理解しておけば、さほど省略について神経質になることはない。また、助詞だけではなく、主語や目的語そのものも省略される場合もあるが、これも現代語でも見られることであるうえに、文意を理解していれば助詞の省略と同様容易に補える。省略が多いということだけは頭に入れておく必要があるが、文脈を正しく理解することを第一に考えていくことが古文を読む際には最も大切なことである。

4 古語辞典の引き方

古語辞典は、基本的には国語辞典と同じように引くことができるが、歴史的仮名遣いで引くこと、活用する語については、動詞・形容詞は終止形に直して引くこと、形容動詞は語幹で引くものが多いことに注意する必要がある。

調べたい語を古語辞典で引くと、意味が複数あげられていることがある。その場合は、それらの中でどの意味がふさわしいのか、前後の文脈を確かめながら決めることが必要となる。

（畠山　俊）

大江山

要旨

和泉式部が夫に同行して丹後に下っていたとき、娘の小式部内侍が歌合の歌人に選ばれた。そのことで定頼中納言が小式部を、母がいなくて困っているだろうとからかったところ、小式部は見事な歌で応じたので、定頼は返歌もできずに逃げ去った。その後に、小式部の歌人としての評判が高まったのである。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜二五・2〈逃げられけり。〉	和泉式部が、丹後に下っていたときに、娘の小式部内侍が歌合の歌人に選ばれた。それを聞いて、定頼中納言が、母上に出した歌の相談への返事は来たかとからかったところ、小式部は、即座に巧みな歌で、母に手紙など出していないと応じた。あまりに見事な応答だったので、定頼は返歌をすることもできずに逃げ去った。
第二	二五・3〈小式部〉〜二五・3〈出できにけり。〉	これ以後に、小式部の歌人としての名声が高まった。
第三	二五・4〈これは〉〜終わり	定頼には、小式部がこれほどの歌を即座に詠むとは分からなかったのであろうか。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①和泉式部、保昌が　妻にて、丹後に　下りける　ほど
格助・体修　格助・資格　格助・帰着　ラ四・用　過・体

に、京に　歌合　ありける　に、小式部内侍、歌詠み　に
格助・時間　格助・場所　ラ変・用　過・体　格助・時間　ラ下二・用　接助・単接　格助・資格

とられて　詠みける　を、②定頼中納言、たはぶれて、小
ラ四・未　受・用　接助・単接　マ四・用　過・体　接助・単接

式部内侍　ありける　に、「丹後へ　遣はし　ける　人
ラ変・用　過・体　格助・時間　格助・方向　サ四・用（尊）定頼→小式部　過・体

は　参り　たり　や。いかに　心もとなく　おぼす
係助・区別　ラ四・用（謙）定頼→小式部　完・終　係助・疑問　副　形ク・用　サ四・終（尊）定頼→小式部

らむ。」と　言ひて、局の　前を　過ぎ　られ
現推・体　格助・引用　八四・用　接助・単接　格助・体修　格助・経場　ガ上二・未　尊・用　語り手→定頼

ける　を、③御簾より　半ら　ばかり　出で　て、僅かに　直衣
過・体　接助・単接　格助・起点　副助・程度　ダ下二・用　接助・単接　形動ナリ・用

の　袖を　ひかへ　て、
格助・体修　格助・対象　八下二・用　接助・単接

大江山　いくの　の　道の　遠けれ　ば　まだ　ふみ　も
格助・体修　形ク・已　接助・順理　副　係助・同類

み　ず　天の橋立
マ上一・未　打・終

と　詠みかけ　けり。④思はずに　あさましく　て、「こ　は
格助・引用　カ下二・用　過・終　形動ナリ・用　形シク・用　接助・単接　代　係助・提示

①和泉式部が、藤原保昌の妻として、（夫の任国の）丹後の国に下っていた間に、都で歌合があった（のだが、その）ときに、（和泉式部の娘の）小式部内侍が、（その）歌合の詠み手として選ばれて（歌を）詠んだのだが、②（そのときのこと）定頼中納言が、ふざけて、小式部内侍が（部屋に）いた時に、「（あなたが）丹後（の母上のもと）へおやりになった使いの人は（都へ）帰参しましたか。どんなに（使いの帰りを）待ち遠しくお思いのことでしょう。」と言って、女房たちの部屋の前を通り過ぎなさったが、③（小式部は、入り口の）御簾から半分ほど（体を）出して、ちょっと（定頼中納言の）直衣の袖を押さえて、

大江山…大江山から生野へとたどって行く丹後への道は遠いので、私はまだ天の橋立に足を踏み入れたこともないし、そこにいる母からの文も見ていません。

と（歌を）詠みかけた。④（定頼は即興の歌の見事さに）意外であり、驚い

いかに。　かかる　やう　やは　ある。」　と　ばかり　言ひ　て、　返
副　連　係助・反語(係)　ラ変・体(結)　格助・引用　副助・限定　八四・用　接助・単接
歌　に　も　及ば　ず、　袖　を　引き放ち　て　逃げ　に
格助・対象　係助・同類　バ四・未　打・用　格助・対象　タ四・用　接助・単接　ガ下二・未
られ　けり。
尊・用　語り手→定頼　過・終

⑤小式部、　これ　より、　歌詠み　の　世　に　おぼえ　出でき　に
代　格助・起点　格助・体修　格助・場所　カ変・用　完・用
けり。
過・終

⑥これ　は　うちまかせて　の　理運　の　こと　なれ　ども、　か
代　係助・区別　副　格助・体修　格助・体修　断・已　接助・逆確　代
の　卿　の　心　に　は、　これ　ほど　の　歌、　ただ今　詠み出だす
格助・体修　格助・体修　格助・場所　係助・区別　代　副助・程度　格助・体修　副　サ四・終
べし　と　は、　知ら　れ　ざり　ける　に
推・終　格助・引用　係助・区別　ラ四・未　尊・未　語り手→定頼　打・用　過・体　断・用
や。
係助・疑問

て、「これはどうしたことだ。こんなことがあるものか。」とだけ言って、返歌もできず、袖を振り放してお逃げになった。

⑤小式部は、このことがあってから、歌詠みとしての評判が出てきたのだった。

⑥こうしたことはごく普通で当然のことなのだけれども、あの中納言のお心には、(小式部が)これほどの歌を、即座に詠み出すことができるとは、お分かりではなかったのであろうか。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶百人一首に「大江山」の歌が採られていることを話題にする。

❷「大江山」を読むに当たり、王朝貴族にとって和歌がどのような意義を持っていたかをとらえる。知技⑵イ

❶便覧や辞書などに百人一首があれば参照する。かるたとして親しまれた歌の背景として、よく知られた話であることを解説する。

❷勅撰和歌集や歌合などについて説明し、日本の古典をよむうえで重要な鍵となる和歌についての興味を促したい。現代の私たちの生活とかけはなれているだけにおもしろく思う生徒も多いはずである。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

展開

学習活動のポイント

❶「全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B⑴ア

❷重要古語の意味・用法を理解する。（「古文を読むために」3を参照する）知技⑴ウ・⑵ウ　→「言葉と表現」1

❸現代語訳する。個々の人物の背景と、おかれている状況を把握する。知技⑴エ　思判表B⑴ア

❹定頼の言葉と小式部の和歌に込められた意味をそれぞれ考える。思判表B⑴イ

❺和歌の中の掛詞を説明する。知技⑴アオ・⑵エ

❻「かかるやうやはある」と定頼が言った理由を考える。思判表B⑴エ

❼作者の考えが書かれている部分を指摘し、内容をまとめる。思判表B⑴オ

❶できるだけ多くの生徒に指名読みをさせる。意味内容をつかんだ音読をできるようにさせる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについ

て叙述を基に的確に捉えているか、音読によって確認する。

❷古語辞典を引く習慣を身につけさせる。用言の用法について理解させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより確認する。

❸会話や動作の主体に注意させる。小式部内侍と母和泉式部について調べ、それぞれの人物の置かれている状況をつかませる。そのうえで、彼らの心情を理解させる。自分が「小式部」「定頼」の立場だったらと想像して、その気持ちを推測させるのもよい。平安文学の理解に必要な「宮中」「後宮」「女房」などの知識を身につけさせる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストやノート提出などにより確認する。

❹❸の人物の背景と状況を参考にする。特に小式部の母の和泉式部が歌人として高い評価を受けていたことがポイントになる。

【評価】登場人物の置かれた状況について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ペーパーテストやノート提出などにより確認する。

❺掛詞は、日本語の特色の一つである「同訓異字」であることから、現代でも「しゃれ」として残っていることに気付かせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・掛詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

❻❹❺を参考に、定頼の予想がどのように裏切られたのかを考えさせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

❼最後の部分から、教訓的な話として伝えられたことを読み取らせる。

【評価】作者の考え方について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、確認する。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶「大江山」の和歌に用いられている掛詞についてまとめ、どのような点がすばらしいと考えられるのか、話し合う。 主態

→「言語活動」1

❶ワークシートや振り返りシートを活用し、「大江山」の歌に用いられた掛詞の意味を理解する前と話し合いの後で、「大江山」の歌への理解がどのように深まったか、自己評価する。

【評価】進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの読み方や、活用語の活用形や種類、係り結びなど文語のきまりを理解し、学習課題に沿って、掛詞の表現技法とその効果について理解しようとしているか、分析する。

発問例と指導上の注意点

●二四ページ

問　**名前が出てくる人物について注も参照して説明せよ。**

答　和泉式部…歌人。小式部内侍の母。夫の保昌の任地である丹後の国に行っている。
保昌…藤原保昌。和泉式部の夫で丹後の国の国司。
小式部内侍…歌人。和泉式部の娘。歌合の歌人に選ばれた。定頼中納言…藤原定頼。貴族。歌人。

補　和泉式部は一条天皇の妃彰子に仕え、歌人として高い評価を得た（「紫式部日記」にも歌才を認めた記述がある）。小式部内侍も共に宮仕えをして、その娘として注目されていたであろう。定頼は「三船の誉れ」（「大鏡」「三船の才」）の藤原公任の子供で、父同様多才な人であった。以上のことも付け加えるとこの人々の背景と状況がよりよく分かると思われる。

問　**「和泉式部」（2行目）は、どの部分に、どういう関係で続いているか、説明せよ。**

答　「下りける」に、主語・述語の関係で続く。

問　**「歌合」（3行目）とは、歌人にとってどのような行事であったか。**

答　宮廷貴族社会での晴れの行事であり、その歌ようである。丹後守になったのは寛仁四（一〇二〇）年ごろと考えられている（寛弘七（一〇一〇）年説もある）。

2保昌が妻にて　「保昌の妻として」。「にて」は資格を表す格助詞。「…として」。

2丹後　丹後の国。現在の京都府の北部。

3歌合　平安末期から鎌倉時代にかけて、貴族の間で行われた文学的遊戯。方人（参加する歌人）が左右のグループに分かれ、同じ題で和歌を作り、左右一首ずつ組にして出し合い、講師（読み手）がそれを読み上げて、「勝ち・負け・持（引き分け）」などを判者に判定させ、判定の理由を付けた判詞が付けられる。歌の題は、事前に出される「兼題」とその場で出される「当座」があった。判者は一人が普通だったが、二人の判者による「両判」、左右の人が全員判者となる「衆議判」もあった。歌合で負けるのは不名誉なこととされ、方人は強い競争意識をもって作歌に当たった。

3小式部内侍　母の式部にちなんで「小式部」と呼ばれたという。母親と共に上東門院彰子に仕えた。藤原教通に愛され、後藤原公成に愛されてその子を生んで没した。万寿二（一〇二五）年、二十歳代後半の夭逝で

語句の研究

●二四ページ

2和泉式部　大江雅致の娘。初め和泉守橘道貞の妻となり、後の小式部内侍を生んだが、冷泉天皇の皇子為尊親王と恋愛関係となり、親王が若くして亡くなった後、その弟の帥宮敦道親王と恋愛関係を結んだ。この、当時の人々の耳目を集めた恋愛事件のゆえに、道貞とは離婚したと想像されている。帥宮も若死にして、その後、式部は一条天皇の中宮彰子に仕えた。おそらくその縁で、彰子の父藤原道長の家司であった保昌と結婚したのであろうが、保昌の丹後守の任期が終わって間もなく別れたようである。帥宮との恋愛を三人称の歌日記にまとめた「和泉式部日記」（他作説もある）、及び家集「和泉式部集」がある。

2保昌　藤原致忠の子。肥前・大和・丹後・摂津の守などを歴任した。「今昔物語集」などにある、怪盗袴垂を畏怖させた話のように武勇の人として有名だが、「後拾遺和歌集」の歌人でもあり、藤原道長の家司としても知られるなど、当時の受領と言われる人々の中でも、声望の高い人物であった

補 人に選ばれるというのは大変な名誉であった。百人一首の「忍ぶれど」（平兼盛）vs「恋すてふ」（壬生忠見）の話なども交えて「歌合」が宮中の一大イベントであり、歌人としての名誉をかけた戦いであったことを知らせたい。この話は、小式部内侍が名誉の歌人の集まりに初めて召された新進であったことが背景になっていることを理解する。

問 「丹後へ遣はしける人」（6行目）とはどのような人を言うのか。

答 小式部内侍が丹後の母のもとに送った使者。

問 「参り」（6～7行目）はどこへ「参り」なのか。

答 都

問 「丹後へ…おぼすらん。」（6～7行目）この定頼中納言の言葉を聞いて、小式部内侍はどのように感じたと思われるか、説明せよ。

答 使いを出したりなどしていないのに、ずいぶん意地の悪い、失礼で我慢のならない侮蔑的なことを言うものだと感じた。

問 定頼は小式部内侍が詠む歌についてどのように考えていたのか。

答 歌合に出す歌を作るのを、有名な歌人である母に手伝ってもらうのだろう（または母に歌を作ってもらうのだろう）、と考えていた。

補 「丹後へ遣はしける人」は、小式部内侍が、あった。母の和泉式部は、娘の死を嘆いて「とどめおきてたれを哀れと思ひけむ子はまさるらむ子はまさりけれ（り）」と詠んだ。保昌の丹後守の任期から考えると、この話の当時は二十四～五歳であったかと思われる。

4歌詠みにとられて　「とる」は選び出す意。歌合で和歌を詠む歌人として選ばれて。

5定頼中納言　四条大納言藤原公任の子で、四条中納言と呼ばれ、詩・歌・管弦・書などに優れ、当代一の才子と言われた父の名を辱めない才を発揮した。「後拾遺和歌集」以下の勅撰集に四十六首入集し、百人一首にとられた「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」はよく知られている。また、能書の誉れ高く、今日、大江切れ・烏丸切れ・山城切れと呼ばれる古筆切れは定頼の筆と伝えられている。社交の才があり、大弐三位や相模らとも親しみ、多くの逸話を説話類に残している。また、「今昔物語集」三十五話には、小式部内侍と恋愛関係にあったことを伝える説話があり、そこには誦経の名手であった定頼が描かれている。また、軽率な性格のために後一条天皇から勘当を受けたり、源頼定を嘲って藤原頼通に叱責されるなどの失敗談が多い。寛徳二（一〇四五）年に五十一歳で没しているので、この話の当時は二十七～八歳であったかと思われる。

5小式部内侍ありけるに　「小式部内侍が局にいた時に」。この言葉から、これは宮中でのやりとりであることが分かる。

6丹後へ遣はしける人　「遣はす」は「行かす」「遣る」などの尊敬語。

6参りたりや　「参る」は「高貴な人のもとへ参上する」の意から、「行く」「来」の謙譲語。ここでは小式部内侍への敬意を表す。

7心もとなくおぼすらむ　「心もとなし」は、①気がかりだ。待ち遠しい。じれったい。②不安だ。③物足りない。不十分だ。ここでは①。「らむ」は現在推量の助動詞で、小式部内侍の心中を想像している。

8局　宮中や上級貴族の屋敷などに仕える女房たちの私室として用いられた部屋。

8過ぎられけるを　「られ」は尊敬の助動詞「らる」の連用形。「逃げられけり」（二五・2）の「られ」、「知られざりけるにや」（二五・5）の「れ」も、共に尊敬の用法。

9直衣　男性貴族の平服。袍に形の似た、それよりやや短く幅の狭い上着。位階による

母の和泉式部に、歌合に出す歌の指導をしてもらうために「遣はし」た人。母の和泉式部が丹後にいること、母は歌人として名高いこと、小式部内侍が歌合の歌人に選ばれていることから考えさせる。「参りたりや。」とは、小式部内侍が、母の和泉式部に、歌合に出す歌の指導をしてもらうために丹後に「遣はし」た人が小式部内侍のもとへ（母からの返事を持って）帰ってきたか、ということ。「参る」が「あなたのところに参上する」の意の謙譲語であることを調べさせるなどしたうえで、事実関係を考えさせる。「心もとなくおぼす」とは、母からの返事が来るのを待ち遠しく思っているということ。「心もとなし」を古語辞典で調べ、現代語との違いを理解させる。

補 **問** **答** **大江山**（11行目）**の歌にある掛詞は何か。**

「いくの道」の「いく」に「行く」と地名「生野」の「生」が掛けられており、「ふみもみず」の「ふみ」に「踏み」と「文」が掛けられている。掛詞を用いた技巧的な歌を即興で作ったことで、小式部内侍の歌才を見せつけるに十分な歌である。なお、「ふみ（踏み）」と「橋」とが縁語であるとする説もある。

問 **答** **まだふみもみず**（11行目）**の部分を、修辞技巧に注意して二通りに現代語訳せよ。**

・まだ足を踏み入れたことはありません。

色の制限がないため、好みの色を用いる。烏帽子または冠をつけ、指貫と共に着用した。勅許があれば宮中でも着用でき、名誉なこととされた。

10袖をひかへて　「ひか（控）ふ」は、力を加えて動きや変化を押さえておくこと。ここは、「袖をつかまえて相手を引きとどめる」の意。御簾から体を出して定頼の直衣の袖を押さえたというのは、若い女性としてはかなり積極的な行動と見られる。技巧的な歌を作ってみせたという点からも、定頼に見くびられたことで、ここはどうしても自分の歌の才を見せつけて言い返さなければ…という、小式部の気負いが感じられる。

11大江山　福知山で山陰道から分かれ、旧官道で与謝峠を越えた右手にある大江山（千丈ヶ岳・八三三メートル）が酒呑童子伝説で名高い大江山なのだが、和歌修辞上の道筋の関係で、京都から亀岡へ抜ける道にある「老ノ坂」のことと考えるべきであろう。

11天の橋立　現在の京都府宮津市にある砂州。丹後の名勝地で歌枕。直前の「ふみもみず」に「踏みもみず」と「文も見ず」とを掛け、天の橋立を踏んでみたこともないし、丹後からの手紙も見ていない、と返した。

●二五ページ

1詠みかけけり　「かく」は、こちらからあるものに対して動作をし向けることを表す補助動詞で、「…しかける、…する」の意。

1思はずにあさましくて　「思はずに」は複合語で、「思いがけない、心外だ」の意の形容動詞「思はずなり」。「あさまし」は、事の意外さに驚きあきれる気持ちを表す。本来は、「見下す」の意の動詞「あさむ」の形容詞形だが、よしあしいずれにも用いる。

2こはいかに　「こ」は代名詞、「は」は係助詞、「いかに」は副詞。「これは、どうしたことだ」などと訳す。「こ」は、ここでは小式部が見事な歌を詠んで応えたことを指す。

2返歌にも及ばず　「及ぶ」は「（ある状態や対象に）到達する」の意で、「…に及ぶ」の形で、「…することが必要である、…することが可能である」の意に用いる。「返歌」については、当時の貴族の社交生活の中で、当意即妙の言葉のやりとり、特に和歌の贈答や唱和が重んじられたことを理解させる。「思はずにあさましくて」という気持が表れた態度である。歌を詠みかけられたら、必ず歌を返すのが、この頃の貴族のたしなみであった。才子の誉れ高い定頼が

ん。・母からの手紙はまだ見ておりません。

●二五ページ

問 **「あさましくて」（1行目）には、定頼のどのような気持ちが現れているか。**

答 即座に巧みに歌で応じたことを驚き、あきれる気持ち。

問 **◉「かかるやう」（1行目）とは、どういうことか。**

答 小式部内侍が、母親である和泉式部の助けを借りずに、「大江山…」のような優れた和歌を詠むことができたこと。

補 小式部内侍の和歌の才能に驚きながら、「かかるやうやはある」という反語の意味を込めた発言をしていることに注意したい。

問 **「かかるやうやはある。」（1行目）と言ったのはなぜか。**

答 定頼は、小式部内侍が自分一人ではうまい歌を作れないと思っていたから。歌のすばらしさに信じられない気持ち。

補 入門期なので、この問い方で難しければ、「かかる」が指示語であること、「や（は）…連体形」の係り結びが、ここでは反語であることをヒントとして示し、まず「かかるやうやはある」を「こんなことがあるものか」と訳す。その後で、「こんなこと」とはこの場合何を指すのかを考えさせれば分かりやすくなる。

問 **[1] 定頼が「返歌にも及ばず、袖を引き放ちて逃げ」（2行目）た理由を示す部分を本文中から抜き出せ。**

[2] この部分から、定頼のどのような人柄が分かるか、次の中から最も適切なものを選べ。

(ア)ユーモラスで、軽率な人物。
(イ)自尊心の高い、繊細優雅な人物。
(ウ)エゴイストで鼻持ちならぬ、非常識な人物。
(エ)羞恥心が異常なほど強いかわり、決断力を欠く人物。

答 [1]かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。（4行目）

[2](イ)

問 **「理運のこと」（4行目）とあるが、なぜそう言えるのか、次の中から選びなさい。**

(ア)歌人であるからには自分で詠むのが当然だから。
(イ)修辞法を駆使すれば上手な歌が詠めるのだから。
(ウ)教養として当意即妙に歌を詠むのは当然だから。
(エ)歌合の歌人に選ばれるほど歌が上手なのだから。
(オ)歌人として特に名高い和泉式部の娘なのだから。

歌を返せなかったというところに、小式部の歌への驚きとうろたえぶりが表れている。

3 歌詠みの… 「歌詠みの」を「世」に続けて、「歌人の世界で」とする解釈と、「歌詠みのおぼえ世に出できにけり。」とあるべきところで、「おぼえ」に続くとする解がある。「古今著聞集」巻五和歌、百八十三話では、「小式部、これより歌よみの世おぼえ出できにけり。」とある。

4 これはうちまかせて 「うちまかす」は、①相手の考えにまかせる。一任する。②普通のこととする。ありふれたものとみる。ここは②。「これ」は小式部内侍が見事な応答をしたことをいうとする解に従う。一説に、小式部が母に代作を依頼したと定頼が想像したことを指すとする。

4 理運のこと 「理運」は、①物事が道理にかなっていること。合理。②運がよいこと。幸運。③好運にまかせて、気ままに振る舞うこと。ここは①の意。

4 かの卿 「か」は代名詞、「の」は助詞。「卿」は上級の貴族。三位および参議以上の公家。また、その人の名の下に付ける尊称。ここでは定頼のことを指す。

4 これほどの歌 「ほど」は「程」で、元々

答 (エ)

問 **「これほどの歌、ただ今詠み出だすべし」（5〜6行目）という言い方は、小式部内侍の歌のどのような点を評価したものか、次の中から適切なものを二つ選びなさい。**
(ア)非凡な漢詩の教養　(イ)歌道に対する執心
(ウ)当意即妙の機知　(エ)無類の才色兼備ぶり
(オ)洗練された社交感覚

答 (ウ)・(オ)

問 **作者の考えが述べられているのはどこか。**

答 「これはうちまかせて…知られざりけるにや。」

補 出来事が述べられている部分と、作者の感想意見が述べられている部分を分けて、教訓的説話によく見られる型であることを説明する。

問 **本文には、どのような教訓が込められているか、一五字以内にまとめて示しなさい。**

答 人を侮ってはならぬということ。

は「程度、頃合い」「身分」「距離」「広さ」「様子」などの意の名詞。鎌倉時代頃から副助詞として用いられるようになった。ここは物事のだいたいの程度を示し、「…ぐらい」の意で、「これぐらいの歌」。

5詠み出だすべしとは　この「べし」は推量にも可能にも採れるが、返歌もできずに逃げてしまった定頼中納言の驚きやとまどいをより強く感じられるように、ここは可能でとり、「小式部がこれほどの歌を、即座に詠み出すことができるとは」とした。

5知られざりけるにや　「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「や」は疑問の係助詞で、この後に「ありけん」などが省略されている。

鑑賞

若い小式部内侍の歌才を見くびって、無用の揶揄を言いかけて恥をかいた定頼中納言の失敗譚ということで、「人倫を侮らざる事」に分類されたものであろう。末尾の「かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。」という編者の評にも、「かの卿の心」の浅さを批判している語気が感じられる。「古今著聞集」第百八十三話では、「小式部、これより歌よみの世おぼえ出でにけり。」で終わっているので、この評言は「十訓抄」の編者のもので、説話から引き出した教戒・徳目によって分類するという編集方針、あるいは関心の持ち方によるコメントである。

しかし、この話を読んで印象に残るのは、そのような教訓よりもむしろ小式部内侍の颯爽とした応対である。彼女の母の和泉式部は、優れた歌人としても、また若い頃からの華麗な恋愛遍歴からも、宮中における有名人であったと考えられるし、共に宮仕えをしていた若い小式部には、いつもその有名人の娘という視線がつきまとっていたであろう。母が再婚した夫と共に丹後へ去った後、その有名人の子が初めて歌合の歌人に選ばれる。あの和泉式部の娘がどのような歌を詠むのだろうかという興味は、だれの胸にもあったはずである。定頼の役回りはもっぱら小式部の引き立て役のようで、いささか気の毒でもあるが、「たはぶれて」とあるように、悪意でからかったのではなく、興味本位の、ほんのいたずら心であったのだろう。一方、小式部も名高い歌人の母を持つプレッシャーは感じていても、それと同時に選ばれる実力も、選ばれたことへの自信もあったと思われる。「御簾より半らばかり出でて、僅かに直衣の袖をひかへて」というしぐさに、晴れの場に初めて臨む小式部の気負いと自負心が表れていると見ることができる。通説によれば、小式部内侍は二十代半ば、定頼は三、四歳年上かと思われる。若き才媛と風流才子との間に起こった話というところに、王朝のみやびが感じられる。

なお、「語句の研究」に示したように、小式部と定頼が恋愛関係にあったという説話があるが、小式部に別の愛人がいたという話の内容からみて、この「大江山」の話よりも後のことではないかと思われる。歌を詠みかけられて逃げ去った定頼が、改めて小式部の才能に魅力を感じたなどと想像するのも楽しいのではないか。

《板書例》　定頼の心情

返歌ができない

①焦り・うろたえ

②小式部内侍の作品につりあう返歌を詠むことの難しさ

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　**「丹後へ遣はしける人は参りたりや。」（二四・6～7）という言葉には、誰の、どのような気持ちが込められているか、考えてみよう。**

【答】小式部内侍が歌合を前にして、丹後にいる母親の和泉式部のもとに使者を遣わして助けを求めたことを想定し、その使者が戻ってきたかどうかを定頼が尋ねていること。

小式部内侍だけの力では歌合にふさわしい和歌を作れないので、母親で有名な歌人である和泉式部に手伝ってもらったのではないかと疑う気持ち。

▼ポイント▲　定頼の発言に込められた心情は、直接的に叙述されているわけではないので、きちんと類推することが重要である。「丹後へ遣わしける人は」という発言は、すでに小式部内侍が使者を送ったことを根拠もなく決めつけている言い方で、極めて挑発的である。場面の雰囲気なども含めて、生徒に想像させたい。

2　**「大江山」の歌で、小式部内侍は定頼にどのようなことを伝えようとしたのか、まとめてみよう。**

【答】歌合のための和歌作りの指南を頼もうとして、母である和泉式部と手紙のやり取りをしたことなどなく、自分ひとりだけで和歌をつくる能力を持っているのだということ。

▼ポイント▲　まずは、和歌の大意を押さえることが重要である。さらに、直前部分で、定頼が小式部内侍に対して「母親の和泉式部の協力がなければ、優れた和歌を詠むことができないのではないか」という趣旨の挑発をしていることを踏まえることで、解答を導くことができる。

和歌の表現には直接含まれていない「自分ひとりだけで和歌をつくる能力を持っているのだということ」という要素を読み取ることができるかどうかがポイントである。

《板書例》　定頼の心情

返歌ができない
①焦り・うろたえ
②小式部内侍の作品につりあう返歌を詠むことの難しさ

言葉と表現の解答例

1 **本文中から形容詞を全て抜き出して、活用形と活用の種類をまとめてみよう。**

【答】・心もとなく（ク活用・連用形）・遠けれ（ク活用・已然形）・あさましく（シク活用・連用形）

▼ポイント▲　活用形については、「①接続」「②活用表の暗記」の二つの視点から決定していくことが大切である。生徒の状況に合わせて順次解説する、という流れでよいのだが、①と②のいずれも重要な知識であるので、丁寧に解説したい。

　活用の種類については、形容詞に助詞「て」を接続させ、「～くて」となったらク活用、「～しくて」となったらシク活用だと判断させるのも、一つの方法である。

言葉活動の解答例

1 **「大江山」の歌について、**

(1) **「いくの道」「ふみもみず」には、それぞれ二つの意味が掛けられている。どのような意味が掛けられているか、まとめてみよう。**

(2) **この歌のどのような点が素晴らしいと考えられるのか、話し合ってみよう。**

（意図）和歌は限られた音数で表現するため、いくつかの決まった修辞を用いることで、表現に幅を持たせる。それらの修辞は作者の感動や思いを相手に伝えようとするためのものである。その一つである掛詞について理解させる。

（手順）

1　「いくの道」「ふみもみず」の箇所に掛けられている意味をそれぞれ書き出してまとめる。図解して整理させてもよい。（ポイント参照）

2　1を踏まえ、掛けられている二つの意味を生かして現代語訳する。なめらかな一文にすることより、二つの意味を捉え、二つの文脈を現代語訳に反映しているかを重視したい。

3　「大江山」の歌のどのような点が素晴らしいかを話し合わせる。掛詞の技巧の妙味だけではなく、掛詞を用いて詠んだ和歌に込められている小式部内侍の心情を読み取らせる。

（ゴール）「大江山を越えて行く道の遠いかなたのことですので、

私はまだ天橋の立も踏んでみたことがありません。」という、母のいる丹後は作者のいる京都から遠く離れている事実を告げる歌の文脈の中に、「母からの手紙は見ておりません」という文脈が重なっているのである。景物と心情とはっきり分けられるようなものではないが、景物を詠んでいるように見せかけながら、別の文脈を用いて言いたいことをそこに込めているところまで読み取らせたい。

▼ポイント▲　掛詞とは、同音異義語を利用して、一つの語に複数（通常は二つ）の意味を持たせる技巧である。一方の意味は自然などの景物で、もう一方は心情にかかわるものであることが多い。歌の中ではひらがなで表現される語が、漢字では二種類に書き分けられてそこに二つの意味が生じると考えることもできる。作者の心と具体物が重なり、奥行きのある歌となる。一首の中に、二つの文脈が存在することになり、それぞれを現代語訳する。

行く
大江山いく[生]の道の遠ければまだふみ[踏み]もみず天の橋立
生（野）　文　も見ず

（小林　俊洋）

古文を読むために　3

このコラムでは活用する品詞を解説している。活用を正しく理解することは辞書を引いて語義を調べたり、前後の語を把握して文意を的確に捉えたりする際に有効である。多少遠回りに感じても、生徒によっては各活用形の意味を押さえておくことで理解が進むこともある。その点も簡単ではあるが、解説している。また、コラムにもあるが、各活用形の下に続く言葉を覚えておくことは大切である。一つ一つの語を上下から考えて正しく捉える習慣を付けさせたい。さらに、係り結びについては現代語にはないだけに、考えにくい面もあるが、使われていた当時は読者の注意を引いていたことを心に留めて読む必要がある。

1 活用・活用形

下に続く言葉によって、語形が変わることを活用といい、変化した一つ一つの形を活用形という。ここでは各活用形に固有の用法について解説しておく。

未然形は、まだ実現していない、まだ存在していない事態を表現する活用形である。そのため、後で詳述するが、仮定・推量・打消を意味する語が続くことが多い。

連用形は、用言などに続いていく（形容詞などは連用修飾語として続く）働きを持つ。この働きを連用修飾法という。また、文をいったん中止し、後に続ける連用中止法も連用形の用法である。さらに、動詞の意味に過去・完了というテンスの表現が続いていく際の活用形であり、接続助詞の「て・つつ」が付くのも連用形である。

終止形は、文を言い切る形である。言い切るとは一つの事態を存在するものとして描くことである。そのためある種の推量の助動詞が付く場合があり、逆接の接続助詞「と・とも」が続くこともある。

連体形は、体言などに続いていくもので、連体修飾語となる。また、体言相当になるため、断定の助動詞が続くことになる。接続助詞の「を・に」が付くのも連体形である。さらに、ある種の語に対する結びとして、文末に置かれることもある。

已然形は、未然形に対応するもので、すでに実現した事柄を示し、確定条件を表す助詞が接続する。また、この活用形もある種の語に対する結びとなる。現代語には已然形はなく、同じ位置に仮定形と呼ばれる活用形が置かれている。

命令形は、その名が表現するとおり、命令で文を言い切る形である。また、許容や放任の気持ちを表すこともある。

活用のある語には変化しない部分と変化する部分があり、それぞれ語幹・語尾（活用語尾）と呼ばれる。ただし、語によっては語幹と語尾の区別のない語もあるので注意が必要である。

2 動詞

物事の動作・作用・存在などを表し、言い切りの形がウ段になるものを動詞という。ただし、ラ変の動詞については言い切りの形が「り」となる。動詞の活用は九種類に分けられるが、まず、属する動詞の少ない六種類について、頭に入れてしまうことが、活用全体を理解するうえで近道である。

1　上一段活用　カ行・ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ワ行に現れ

る十数語である。

2　下一段活用「蹴る」一語。

＊　活用が上一段と同形式で規則的なため、一語でも変格活用とはしない。

3　カ行変格活用　来

4　サ行変格活用　す・おはす

＊　サ変には多くの複合動詞がある。

漢語＋す　御覧ず　生ず　死す　信ず

名詞＋す　ものす　あるじす　供す

用言連用形＋す　送りす　尽きす　久しうす

5　ナ行変格活用　死ぬ・往ぬ

6　ラ行変格活用　あり・居り・侍り・いまそがり

＊　ラ変は次のような複合動詞を作る。

さり　かかり　しかり　持たり

他の三種類（四段活用・上二段活用・下二段活用）に属する動詞は、打消の助動詞「ず」を付けることにより見分けられる。

7　ア段の音に「ず」が付くものは四段活用である。

8　イ段の音に「ず」が付くものは上二段活用である。

9　エ段の音に「ず」が付くものは下二段活用である。

＊　四段活用にはア行、ワ行に属するものはない

＊　ヤ行上二段活用は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語

＊　ア行下二段活用は「得」「心得」の二語

＊　ワ行下二段活用は「植う」「据う」「飢う」の三語

＊　ザ行下二段活用は「交ず」「混ず」の二語

古語と現代語とを動詞の活用の仕方で対照すると次のようになる。

四段活用 ┐
ナ行変格活用 ├――五段活用
ラ行変格活用 ┘
下一段活用 ――下一段活用
上一段活用 ――上一段活用
上二段活用 ――上一段活用
カ行変格活用 ――カ行変格活用
サ行変格活用 ――サ行変格活用

古文の動詞の活用は必ず同一の行内で行われる。当然歴史的仮名遣いであり、発音通りではないことがあるから、きちんとした五十音図に対する理解が必要である。また、「活用」「活用形」「活用の種類」などの語を正しく使い分けることを心がけたい。

●自動詞と他動詞　その語だけで主語の動作・作用を表す動詞を自動詞といい、表す動作・作用が、他に対して働きかけている動詞を他動詞という。「…が～する」の形の文が自動詞の文、「…を～する」の形の文が他動詞の文である。つまり、他動詞の多くは動作の対象を示す目的語を伴って使われるのである。しかし、日本語では自動詞、他動詞の区別がつきにくい場合がある。元来、日本語の自動詞、他動詞の問題は「受身」と「使役」に関係していると言われている。他動詞は主語がある動作をして、その動作が他の目的に及ぶものだが、使役は自分でしないで他の人にさせるということで、動作主が異なる。しかし、他に影響を及ぼすと

いう点で共通であるとも考えられ、「す」が付くと他動詞になる場合がある。一方、自動詞は「る」が付くことで「自然に…なる」ことを表すことから出来上がったものがある。後の例の5を比較してみると、そのことが分かる。しかし、1〜4の例では自動詞・他動詞の区別がつけにくいケースもある。それでも、主語の推定、文脈の整理など古文の読解上、重宝な点もあるし、語幹の同じ動詞でも活用の行、種類を形の上から見分けることもできるので、可能ならば自動詞・他動詞の区別をしておくのが有用である。

自動詞の文　水　流る
他動詞の文　水を　流す

次に、動詞を自動詞か他動詞かという観点から分類しておく。

1　自動詞だけのもの　行く　走る　死ぬ　老ゆ
2　他動詞だけのもの　打つ　蹴る　着る
3　自動詞・他動詞両方あり、形が同じもの
　吹く　開く　笑ふ
4　自動詞・他動詞両方あり、語形が同じで活用が異なるもの
　育つ（タ四／タ下二）　折る（ラ下二／ラ四）
5　自動詞・他動詞両方あり、語形・活用が異なるもの
　流る　流す　　離る　離す

●補助動詞　動詞が本来の意味を失って、助動詞のように他の語の下に付いて上の語を補助したり、ある一定の意味を添える形で用いられたりする場合、補助動詞という。補助動詞は「あり」「居り」などの存在に関するものや、「給ふ」「おはす」「奉る」などの敬語に関するものなどもある。補助動詞に対する言い方として、普通の用法の動詞を本動詞ということがある。

動詞の活用に慣れるためには、多くの動詞の活用を調べてみることに尽きる。いつまでも未然形から命令形まで活用させてみなければ活用が判断できないようでは、活用の仕方や活用形を知ることが最終的な目的ではない以上、あまり役に立たない。早い段階で動詞の活用については瞬時に判断できるような力を身に付けさせたい。言葉の意味を調べるために辞書を引くときも動詞は終止形で引くわけだから、すぐにそれが浮かばなければ効率が悪いのである。

3 形容詞

形容詞は物事の性質・状態、話し手の感情を表すものである。形容詞の活用にはク活用とシク活用の二種類がある。おおまかな傾向としては、ク活用には状態形容詞が多く、シク活用には感情形容詞が多いということがある。この二つの活用を見分ける方法としては、連用形の後に動詞の「なる」を付けてみる方法がある。「よくなる」「高くなる」など「し」が「なる」の前に入らないものはク活用、「美しくなる」「寂しくなる」など「なる」の前に「し」が入るものはシク活用である。また、「同じ」「いみじ」など基本形が「じ」で終わるものがあるが、それらは全てシク活用である。

●カリ活用　形容詞の活用には連用形「−く」にラ変「あり」が付き、「−く＋あり→かり」と熟合したカリ活用と呼ばれるものがある。これは形容詞本来の活用だけでは、動詞のように助動詞を自由に続けることができなかったため、「あり」を介して助動

詞に続けたものが活用として定着したものである。この活用を補助として、初めて用言としての機能を果たすことができるのである。

4 形容動詞

形容動詞は物事の性質・状態を表し、言い切りの形が「なり」「たり」となるものをいう。言い切りが「なり」となるものをナリ活用といい、これは上代から見られるものである。一方、言い切りが「たり」となるタリ活用は鎌倉時代に漢語に「たり」が付いた形として現れたと言われている。そのためタリ活用の形容動詞の語幹には、同じ語を重ねたもの（堂々・洋々）や「…然」となるもの（平然・泰然）が多い。形容動詞は「名詞＋断定の助動詞」と見分けがつきにくいが、語の前に「いと」を付けて文意が通れば、形容動詞である。

5 係り結び

文は普通、終止形あるいは命令形で結ぶのが原則である。しかし、文中に係助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」があるとき、それを受けて連体形で文を結び、「こそ」があるとき、已然形で結ぶ。これを係り結びという。係り結びは一文の中で成立するものであるから、特に引用を表す「と」「など」が文中にあるときには注意を要する。「ぞ」「なむ」「こそ」は強意の意味があり、「や」「か」は疑問・反語の意味がある。強意を表すものでは、「なむ」→「ぞ」→「こそ」の順に強意の程度が強くなる傾向があり、「こそ」を使う場合は作者の心情が強く表れると言われている。次に、疑問・反語の区別であるが、見分けが難しい場合がある。前後の文脈から慎重に判断する必要がある。ただし、「やは」「かは」の時は反語であることが多い。また、活用語に付く場合、「や」は終止形に、「か」は連体形に接続するが、反語や条件を表す場合などには已然形に付くこともある。「ありやなしや」「あるかなきか」などの例を頭に入れておくと接続は容易に分かる。

また、係り結びが成立しないケースがいくつかある。

1　結びの語で文が終止せずに、主に接続助詞によって下に続けたりすることで、結びがなくなることを「結びの消滅（流れ）」という。

2　結びの語が推測できる場合は省略することがある。

3　「こそ」の結びとして已然形が現れるが、文が終止せず、続いていく場合は逆接強意の意味となる。

係り結びが成立している場合の文の終わり方は異例のもので、それゆえの効果も本来は持っていたのである。しかし、係助詞があってもきちんとした係り結びが成立していない場合もある。あまりこだわりすぎないようにしたい。

（畠山　俊）

単元の言語活動１
声に出して古文を読む

活動のねらい

最初の単元なので、滑らかな音読ができるようになることを第一の目的としている。

現代語でもよく聞いてみると文字と発音とが一致していない箇所がある。しかし、現代仮名遣いはなるべく発音に沿う仮名遣いを目指している。いっぽう、歴史的仮名遣いでは表記通りに発音しない場合が多くあり、その文字と発音とのルールを理解した上で、正しく読むことが滑らかな音読のためには必要である。また、正しく読むことによって意味が分かりやすくなる場合も多い。

古文を読むことに慣れることが今回の活動のねらいであり、さらに、正しい読みかどうかを生徒たち自身で判断することにより、ルールに習熟しやすくなることもねらいのひとつである。

タイトル・序文の解説

まず、現代語から文字と発音とが異なる場合があることに気づかせる。ふだん、何気なく使っている言葉も吟味してみると、実は文字通りに発音していないことが分かる。文字と発音との関係に注目させることから課題へ近づくことができる。現代語を手がかりとして、古文において文字と表記が異なる箇所を正確に読めるようにしなければならないことが重要であると認識させるとよい。

「課題」の解説

課題　**「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を、声に出して読んでみよう。**

この活動は古文の表記を正確に音読することを目的としている。特に声を出すことで自分自身の読みを確認したり、他の生徒が、読んでいる生徒の読みを確認したりできるようにすることを重視している。それぞれの教材の読解を終え、内容が理解できている前提で、一つ一つの言葉を大切にして、意味が分かるように区切り、発音することを意識しながら音読する。

「活動」の解説

1　「古文を読むために1」（一八ページ）の1歴史的仮名遣いの読み方のルール1〜4に当てはまる箇所を「児のそら寝」（一六〜一七ページ）「絵仏師良秀」（二〇〜二一ページ）「大江山」（二四〜二五ページ）の本文から、それぞれ指摘してみよう。

「古文を読むために1」（一八～一九ページ）に基づいて、古文を読む際に注意しなければならないルールとそのルールを適用する本文箇所をチェックする。ルビになっているところもルールの適用箇所かどうかを確認する。

チェックする際に蛍光ペンなどを利用し、1～4のルールごとに色分けなどしながら、ルールに習熟するようにする。慣れてきたら色分けせず、適用箇所だけ分かるようにするなど徐々に何もなくても正確に読めるようにする。知技(1)ウ・(2)ウ

この作業の際に正確に読めると意味が理解できる語に留意しておき、現代語とのつながりを意識するとよい。知技(2)エ

例　宵（よひ→ヨイ）　申す（まうす→モース）
　　一声（ひとこゑ→ヒトコエ）

このようにすると正確に読むことが文脈の理解につながることがよく分かってくる。

▼評価のポイント▲机間巡視をしながら、教科書を確認し、チェックすべき箇所がチェックされているか、適切なルールを適用しているか、確認する。あらかじめチェックした本文をＰＣで作成しておき、プロジェクターに写して自己確認させる、解答のプリントを作成しておき配布するなどの方法も取ることができる。

2　「古文を読むために1」の1歴史的仮名遣いの読み方のルール5に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘してみよう。

・その際に、1のルールと5のルールを二段階に用いている箇所に気をつける。

1でチェックした箇所と重なるので、該当箇所だけを検討していけばよい。

例　1 1 言ふ（いふ→イウ）　2（イウ→ユー）
　　1 1 笑ふ（わらふ→ワラウ）　2（ワラウ→ワロー）

煩雑な作業になるが、正確に発音すると現代語でも表記と発音が異なる箇所が該当しており、現代語としても自然な発音となっていることが分かる。また、古文特有の語は分かりにくい場合があることに留意させると本文読解時の語釈と結びつけることができる。知技(2)エ

例　なんでふ→ナンデウ→ナンジョー

3　グループを作り、「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を間違えた箇所で交代しながら、順に音読してみよう。

グループでひとりずつ、説話三教材を順番に音読する。その際に聞いている生徒は間違えを聞き逃さないようにし、間違えたらそこで交代するというゲーム的な要素を取り入れて、楽しみながら音読の練習ができるようにすることもできる。誰も間違わなかった場合は全員が三教材とも読むことになる。滑らかな音読の場合、内容の理解もしやすくなることをそれぞれが実感できることが望ましい。知技(1)アエ　思判表B(1)アウ

▼評価のポイント▲それぞれのグループで一番長く読むことがで

きた生徒に高い評価を与える。また、グループ代表をクラス全員の前で再度三教材を間違えないように読ませ、聞いている生徒に間違いを聞き取らせることを試みてもよい。できれば全員が古文の読み方のルールに従って古文を正確にかつ滑らかに読むことができるようになりたい。そしてこの先の教材も正確に読むことができるようになるとよい。

（畠山　俊）

主態

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔知識・技能〕⑴エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴ア　「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴ウ　「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで説話のおもしろさを味わい、文語のきまりを理解し、古文に親しみ、歴史的仮名遣いの読み方を理解し、今までの学習を生かして、古文を音読しようとしている。
◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑵ア